27-2621
12005012425 28
7
- 521

日本口語法

〔昭和版〕

東京女子高等師範學校長

吉岡郷甫著

東京・大阪

東洋圖書株式合資會社

發行

27-262 1.

序

本書は明治三十九年一月初めて發行したものである。稿を終へた前年の十月、緒言として書いたものに次のやうな條(くだり)がある。

口語法の編纂は急務中の急務である。然るにまだ其の企のあることを聞かぬのを遺憾に思つて、此の春國語問題の囂しかつた頃に筆を起し、戰爭の噂も耳に疎くなつた今、漸く筆を措いたのが本書である。菲才な自分が閑を偷んでの研究であるから、不完全な節は數々あるであらうが、多少でも斯學に貢獻することが出來れば望外の幸である。

當時口語が漸次國民教育に重きを置かれて來たに係らず、まだ組織立つた口語法の編纂されたものがなかつたので、本書は斯界各方面の歡迎を受けて、幾回も版を重ねることの出來たことは、全く望外の幸であつた。しかも明治三十八年は文部省が假名遣の改正を企てた年で、其の諮問を受けた國語調査會は、口語體の文章に表音的假名遣を適用したいといふ意見を立ててゐたので、本書も表音的假名遣を用ゐて、口語の法則を纒めたのであるが、明治四十一年九月、文部省は世論の趨向に

鑑みて、假名遣の改正を斷念するに至つたので、本書も亦歴史的假名遣を用ゐて、法則を纒め直すと共に、全部に亘つて幾多の修正增補を施した。かくて又世の愛幸を受けること久しきに及んだ。會、予は職を地方に奉ずることになつて、其の後本書の修正增補に從ふことが出來なくなつたために、大正の末には遂に之を絶版するの已むなきに至つたのである。然るに東洋圖書株式合資會社永田與三郎氏は往時本書を御愛讀下さつたお一人だといふので、昨年來頻りに其の改版を慫慂される。曩に國語調査會の「口語法」「同別記」の出版されたのを始として、近年口語に關する色々な著書も發刊されてゐるので、稍躊躇されるところもないではないが、尙本書が聊か特色を有つてゐるところもあらうかと思ふので、敢て其の意に從つて、新に文章篇の最後に第七章を加へたのを初め多少の修正增補を加へ、玆に昭和版として再び世に出すことにしたのである。本書の語法が主として東京地方の教育ある中流社會の言語から歸納したものであること、口語法の文語法と共通な點は成るべく廣く行はれてゐる說を取つたこと、東京語と地方語との差異及口語法と文語法との區別を註に附說したことなどは總べて舊版と同じである。

終に予は今回の改版に方つて、前發行者大日本圖書株式會社が本書の版權を讓渡された事に對し、深甚の謝意を表するものである。

昭和八年三月

吉岡郷甫識

日本口語法〔昭和版〕目次

總　說……一

語・辭―名詞―代名詞―數詞―動詞―形容詞―副詞―接續詞―感歎詞―助動詞―助詞―接頭語・接尾語―句―文―主語・述語―節

品詞篇

第一章　名　詞……五

第一節　名詞及び其の種類……五

名詞―具體名詞・無形名詞―固有名詞・普通名詞

第二節　恭敬名詞……六

第三節　名詞の數……六

第二章　代名詞……八
第一節　代名詞及び其の分類……八
代名詞—事物代名詞—場所代名詞—方角代名詞—人代名詞
第二節　代名詞の數……一四
第三章　數　詞……一六
數詞—普通數詞—本數詞·助數詞—序次數詞
第四章　動　詞……二〇
第一節　動詞及び其の活用の種類……二〇
動詞—活用—四段活用—上一段活用—下一段活用—カ行變格活用—サ行變格活用
第二節　活用形の名稱……二七
否定形—連用形·中止形·名詞形—終止形·連體形—假定形—命令形

第三節　語尾の音便……三一
音便—イ音便—撥音便—促音便
第四節　敬讓動詞……三三
敬讓動詞—活用
第五節　動詞の性……三六
自動詞—他動詞—補語·客語
第五章　形容詞……四一
第一節　形容詞及び其の活用……四一
形容詞—活用—語幹
第二節　活用形の名稱……四三
中止形·副詞形—終止形·連體形—假定形
第三節　形容動詞……四五

形容動詞—第一種の形容動詞—第二種の形容動詞—第三種の形容動詞
第四節　指示形容詞……四八
第六章　副　詞……五〇
第七章　接續詞……五一
接續詞—第一種の接續詞—第二種の接續詞—第三種の接續詞—第四種の接續詞
第八章　感歎詞……五五
第九章　助動詞……五七
第一節　所動の助動詞……五七
第二節　勢動の助動詞……六〇
第三節　令動の助動詞……六二

第四節　敬讓の助動詞……六五
第五節　指定の助動詞……七二
第六節　推量の助動詞……七四
第七節　譬喩の助動詞……七六
第八節　希望の助動詞……七七
第九節　否定の助動詞……七八
第十節　時の助動詞……八二
現在時—過去時—過去時の助動詞—未來時—未來時の助動詞—進行時—存在時
第十一節　助動詞と助動詞との連續……九〇
第十章　助　詞……一〇〇
第一節　第一類の助詞……一〇〇

が—の—に—を—と—へ—から—まで—より—で—や—だの
第二節　第二類の助詞……一〇八
は—も—でも—さへ—こそ—ばかり—だけ—ほかしか—きり・ぎり—ほど—くらゐぐらゐ—やら—か—なり
第三節　第三類の助詞……一一九
か—ものか—よ・い・ろ—な—や—な—ね—ぞ・ぜ—よ—さ—は—とも
第四節　第四類の助詞……一二四
ば—と—と・とも—なら—ものなら—からので—て—し—が—ても・も—けれども・に・のに・ものを・もののところが—ながら—かたがた
第十一章　品詞の構成……一三四
第一節　接頭語・接尾語……一三四

第二節　熟語・疊語……一三八

文章篇

第一章　文及び其の成分……一四三
第一節　主要成分……一四三
主要成分—主語—述語
第二節　補足成分……一四七
補足成分—補語—客語
第三節　總主語・獨立語……一五〇
第四節　附屬成分……一五一
附屬成分—形容的修飾語—副詞的修飾語
第二章　成分の位置……一五六

成分の普通の位置―成分の倒置
第三章　成分の省略……一六〇
主語の省略―述語の省略―補語・客語の省略
第四章　節の種類……一六五
節―名詞節―叙述節―形容節―副詞節―附屬節―獨立節
第五章　文の種類……一六八
單文―複文―合文―混文
第六章　文の解剖……一七四
文の解剖―單文の解剖―複文の解剖―合文の解剖―混文の解剖
第七章　呼應……一八七
第一節　副詞的修飾語と述語との呼應……一八七
第二節　副詞節と述語との呼應……一九〇

（終）

日本口語法〔昭和版〕

吉岡郷甫著

總說

語・辭　聲音の或意味を表すものを語といひ、語に附屬しなければ意味を表すことの出來ぬものを辭といふ。例へば「花はまだ咲かぬ」「庭に大きな松の木がありますの「花」「まだ」「咲か(咲く)」「庭」「大きな」「松の木」「あり(ある)」は語で「は」「ぬ」「に」「が」「ます」は辭である。

語を其の品に依つて次の八つに別ける。

名詞　「道で鉛筆を拾つた」「お花や、もつと前へお出で」の「道」「鉛筆」「お花」「前」などのやうに、物事の名をいふ語を**名詞**といふ。

代名詞　「あすこでこれを拾つた」「おまへ、もつとこつちへお出で」の「あすこ」「これ」「おまへ」「こつち」などのやうに、名詞に代へて用ゐる語を**代名詞**といふ。

數詞　「一つは無くなりました」「鉛筆を二本下さい」の「一つ」「二本」などのやうに、物事

の數量をいひ、「一番」で及第した、「文學雜誌の八號を見たか」の「一番」「八號」などのやうに、物事の序次をいふ語を**數詞**といふ。

名詞・代名詞及び數詞は實體又は實體として取扱ふ事の出來るものを表す。總稱して**體言**と云ふ。

動詞　「鳥が飛ぶ」「山を越えて、川を渡る」の「飛ぶ」「越え(越える)」「渡る」などのやうに、おもに物事の動作をいふ語を**動詞**といふ。

形容詞　「山が高い」「綺麗な着物」の「高い」「綺麗な」などのやうに、おもに物事の有樣をいふ語を**形容詞**といふ。

動詞・形容詞は物事に就いて叙述するに用ゐる。總稱して**用言**といふ。

副詞　「ゆつくりお話しなさい」「たいそう可愛らしい子」の「ゆつくり」「たいそう」などのやうに、おもに用言の意味を限定する語を**副詞**といふ。

接續詞　「林檎又はバナヽ」「あの人は病氣ですか。それでは仕事も出來ますまいね」の「又は」「それでは」などのやうに、語句を接續する語を**接續詞**といふ。

感歎詞　「おう、くやしい」「おや、さうですか」の「おう」「おや」などのやうに、感動した時に發する聲を**感歎詞**といふ。

辭を品に依つて次の二つに別ける。

助動詞　「犬に足を嚙まれる」「ゆふべ雨が降つた」の「れる」「た」などのやうに、おもに動詞に附いて、其の叙述を助ける辭を**助動詞**といふ。

助詞　「鳥が飛ぶ」「犬を打つ」の「が」「を」などのやうに、體言に附いて、他の語との關係を示し、「山は高い」「こゝにもある」の「は」「も」などのやうに、種々の語辭に附いて、種々の意趣を表し、「早く起きろ」「此の湖は深いか」「あの子は感心ですね」の「ろ」「か」「ね」などのやうに、文の終に附いて、其の體を變じ、「擊てば鳴る」「打たれて泣く」の「ば」「て」などのやうに、用言に附いて、語句と語句とを接續する辭を**助詞**といふ。

以上述べた語及び辭の種類を**品詞**といふ。

接頭語・接尾語　「お話」「さし出す」といふ語の「お」「さし」などのやうに、語の上に附いて、更に一つの語を作るものを**接頭語**といひ、「叔父樣」「學者ぶる」といふ語の「樣」「ぶる」などのやうに、語の下に附いて、更に一つの語を作るものを**接尾語**といふ。

句　「美しい鳥」「樹の枝で」「面白く鳴く」などのやうに、二つ以上の語辭のものを含むが結

合して、語が表す意味よりも、稍こみいつた意味を表すものを**句**といふ。

文　「犬が走る」「猫が鼠を捕る」などのやうに、語辭が結合して、一つの完全な思想を表すものを**文**又は**文章**といふ。

主語・述語　「月が出る」「山は高い」といふ文の「月」「山」などのやうに、叙述の題目となる語を**主語**といひ、「出る」「高い」などのやうに、主語の動作や有樣を叙述する語を**述語**といふ。

節　「日のたつのは早い」「雨の降る日は陰氣だ」「品はよいが値が高い」といふ文の「日のたつ」「雨の降る」「品はよい」などのやうに、一つの完全な思想を表しては居るが、或大きな文の一部分になつて居るものを**節**といふ。

品詞篇

第一章　名詞

第一節　名詞及び其の種類

名詞　物事の名をいふ語を**名詞**といふ。これに左の種類がある。

具體名詞・無形名詞　名詞の中で、「人」「馬」「山」「野」「水」「酒」などのやうに、實體を表すものを**具體名詞**といひ、「勇氣」「親切」「喜(ヨロコビ)」「休(ヤスミ)」「廣さ」「寒さ」などのやうに、實體の屬性を表すものを**無形名詞**といふ。

固有名詞・普通名詞　具體名詞の中で、「富士山」「法隆寺」「西鄕隆盛」「生嗟(イケズキ)」「源平盛衰記」「小鳥」などのやうに、或特別な物事にばかりあてはまる名詞を**固有名詞**といひ、「山」「寺」「人」「馬」「書物」「劍」などのやうに、同種類の物事には、どれにもあてはまる名詞を**普通名詞**といふ。

第二節　恭敬名詞

一般の名詞を尊敬していひ、丁寧に又は優美にいふには「おみ足」「お手紙」「御近所」などのやうに、「おみ」「お」「御」などの接頭語を附ける。此の中「おみ」は用所が甚だ限られて居る。

人に關する名詞を尊敬していふには、「お姫さま」「叔母さん」「大田先生」「田中君」などのやうに「さま」「さん」「先生」「君」などの接尾語を附ける。此の中「さま」はあらたまつた場合に用ゐ、「さん」は最も廣く用ゐる。又「先生」は技藝に長けた人を呼ぶに用ゐ、「君」は多く學者・書生などの間に用ゐ、共に固有名詞ばかりに附く。

右の外、天皇(皇帝)皇后には「陛下」、皇族には「殿下」といふ接尾語を附けて申上げ奉り、高位・高官の人には「閣下」「殿」などの接尾語を附けて云ふ。

第三節　名詞の數

我が國では、名詞が單數であるか、複數であるかを示すに、一定の規則がない。多

くは、名詞の儘で、單數をも複數をも表す。例へば「木」に「林檜」が生つて居る」といふ文の「木」「林檜」は一本あつても、澤山あつても、又は一つ生つて居ても、澤山生つて居ても、かういふのである。併し、間々複數を示す爲に、

一、「人々」「國々」「所々」「隅々」などのやうに、同じ名詞を重ね、

二、「諸事」「多年」「數人」などのやうに「諸」「多」「數」などの接頭語を附け、

三、「奥樣がた」「ねえさんたち」「お子供衆」「車夫ら」「下女ども」「筆など」のやうに、「がた」「たち」「衆」「ら」「ども」「など」(なぞ・なんぞ・ともいふ)などの接尾語をつけて用ゐることがある。

右の三の場合で、「がた」「たち」「衆」「ら」「ども」は、人に關する名詞に附き、「など」は、人又は物事に關する名詞に附く。人に關する名詞に附く接尾語の中で、「がた」は尊敬の意を表し、「たち」「衆」は親愛の意を表す。又人又は物事に關する名詞に附く「など」は同じ物事の複數を示すのではなくて、常に異種の物事の、他にもある意を表す。例へば「あの店で、筆や紙などを賣つて居る」といへば、筆・紙の外に、鉛筆・ペン・インキのやうなものをも賣つて居る意を表すのである。

第二章　代名詞

第一節　代名詞及び其の分類

代名詞　名詞に代へて用ゐる語を**代名詞**といふ。之を事物代名詞・場所代名詞・方向代名詞・人代名詞の四つに分ける。

事物代名詞　「これ」「それ」「あれ」「どれ」「どつち」「なに」は物事の名に代へて用ゐる語である。此等を**事物代名詞**といふ。

事物代名詞の中で、「これ」は手近な物事の名に代へて用ゐる語であるから、**近稱**といひ、「それ」は稍〻離れた物事の名に代へて用ゐる語であるから、**中稱**といひ、「あれ」はずつと離れた物事の名に代へて用ゐる語であるから、**遠稱**といひ、「どれ」「どつち」「何」は不定な物事の名に代へて用ゐる語であるから、**不定稱**といふ。不定稱の「どれ」「どつち」は「どれが善からう」「どつちをお取りなさる」のやうに、擇ぶ物事の不定なときに用ゐ、「何」は「何を見て入らつしやる」のやうに、總べて物事の不定なときに用ゐる。

○「どれ」「どつち」には本文に述べた用法の外に、「どれも善く出來て居る」「どつちも感心しない」などのやうな用法があり、「何」には「家も何も賣つてしまつた」「何も買はなかつた」「何もかも揃つて居る」「何か持つて來い」などのやうな、いろ〳〵な用法がある。

近稱	中稱	遠稱	不定稱
これ	それ	あれ	どれ どつち なに

場所代名詞　「ここ」「そこ」「あそこ(あすこ)」「どこ」は場所の名に代へて用ゐる語である。此等を**場所代名詞**といふ。

場所代名詞にも、近稱・中稱・遠稱・不定稱の別がある。「ここ」は近稱、「そこ」は中稱、「あそこ(あすこ)」は遠稱、「どこ」は不定稱である。

○場所代名詞の不定稱も、不定な場所の名に代へて用ゐる外に、「田舍にもどこにも惡い病氣がはやる」「どこも暗い」「どこもかしこも探しました」「どこかへ引越しませう」など、尙ほ他の用法がある。

近稱	中稱	遠稱	不定稱
ここ	そこ	あそこ あすこ	どこ

近稱・中稱・遠稱に「ら」といふ接尾語を附けて「ここら」「そこら」「あそこら(あすこら)」として用ゐ、又「いら」を附けて「ここいら」「そこいら」「あそこいら(あすこいら)」として用ゐるときには、其の周邊をこめた稍廣い場所を表す。

方角代名詞　「こつち」「そつち」「あつち」「どつち」は方角の名に代へて用ゐる語である。此等を**方角代名詞**といふ。

方角代名詞にも近稱・中稱・遠稱・不定稱の別がある。「こつち」は近稱、「そつち」は中稱、「あつち」は遠稱、「どつち」は不定稱である。

○方角代名詞の不定稱にも「どつち」を向いても知らぬ人「どつち」もこつちも塞がつて居る「どつちかへ行つたらよからう」などのやうな用法がある。

近稱	中稱	遠稱	不定稱
こつち	そつち	あつち	どつち

方角の代名詞は、其の音便でない形の「こち」「そち」「あち」「どち」に「ら」といふ接尾語を添へて「こちら」「そちら」「あちら」「どちら」として用ゐる時には、稍丁寧になる。

人代名詞　「わたくし」「あなた」「あのかた」「どなた」などのやうに人の名に代へて用ゐる語を**人代名詞**といふ。

人代名詞の中で「わたくし」「わたし」などは、自分の名に代へて用ゐる語であるから、**自稱**といひ、「あなた」「おまへ」などは、話しかける人の名に代へて用ゐる語であるから、**對稱**といひ、「この」「その」「あの」に「かた」「人」といふ語を附けた「このかた」「そのかた」「あのかた」「この人」「その人」「あの人」、及び「これ」「それ」「あれ」などは話の中に引く人の名に代へて用ゐる語であるから、**他稱**といひ、「どの」に「かた」「人」といふ語を附けた「どのかた」「どの人」及び「どなた」「だれ」などは不定な人の名に代へて用ゐる語であるから、**不定稱**といふ。

○「だれ」も居ない「だれ」でもかれでも假借しない「どなたか來て下さい」などのやうな用法が人代名詞の不定稱にもある。

他稱には、近稱・中稱・遠稱の別がある。「このかた」「この人」「これ」などは近稱、「そのか

た」「その人」「それ」などは中稱、「あのかた」「あの人」「あれ」などは遠稱である。

自稱	對稱	他稱 近稱	他稱 中稱	他稱 遠稱	他稱 不定稱
わたくし わたし	あなた おまへ	このかた このひと これ	そのかた そのひと それ	あのかた あのひと あれ	どのかた どなたかた どのひと だれ

自稱の中で、「わたくし」は丁寧な語で、主に目上に對するときに用ゐ、「わたし」は同輩以下に對するときに用ゐる。

○「わたくし」「わたし」の外に「てまへ(てまい)」「僕」「あたし(あたい)」「わし(わつち)」「わちき」「おれ(おら)(おいら)」などゝいふのもあるが、使用の範圍の狹いもの、又は詞品の卑しいものである。

對稱の中で(あなた)は丁寧な語で、目上又は同輩に對するときに用ゐ、「おまへ」は目下に對するときに用ゐる。「あなた」に「さま」といふ接尾語を附けて、「あなたさま」といへば、更に丁寧な語になり、「おまへ」に「さん」といふ接尾語を附けて、「おまへさん」といへば、稍丁寧な語になる。

○「あなた」「おまへ」の外に「きみ」「きさま」といふのがある。「きさま」はぞんざいな語である。

他稱の中で、「このかた」「そのかた」「あのかた」は丁寧な語で、おもに目上を引いていふときに用ゐ、「このひと」「そのひと」「あのひと」は同輩又は目下、「これ」「それ」「あれ」は專ら目下を引いていふときに用ゐる。「このかた」「そのかた」「あのかた」の「かた」に「お」といふ接頭語を附けて、「このおかた」「そのおかた」「あのおかた」といへば、更に丁寧な語になる。

○本文に擧げた外に「こいつ」「そいつ」「あいつ」といふのがある。甚だぞんざいな語である。

不定稱の中で、「どのかた」「どなた」は丁寧な語で、おもに目上の人の不定なときに用ゐ、「どのひと」は同輩又は目下、「どれ」は專ら目下の不定なときに用ゐる。「どのかた」の「かた」に「お」といふ接頭語を附けて、「どのおかた」といひ、「どなた」に「さま」といふ接尾語を附けて、「どなたさま」といへば、更に丁寧な語になる。

○本文に擧げた外に「どいつ」といふのがある。甚だぞんざいな語である。

「じぶん」といふ語は、「これはわたくしがじぶんで考へたのです」「きみ、それはじぶんを欺くといふものだ」「あの人はじぶんの利益ばかりを圖つて居る」などのやうに、自稱・對稱・他稱に通じて用ゐる語である。これを**反照代名詞**といふ。

第二節　代名詞の數

代名詞の複數を示すには「がた」「たち」「ども」「ら」などの接尾語を附ける。卽ち左の通である。

これら	それら	あれら	
わたくし(ら・たち・ども)	わたし(ら・たち・ども)		
あなたがた	おまへ(ら・たち・がた)		
このかたがた	そのかたがた	あのかたがた	
どのかたがた	どなたがた		
このひとたち	そのひとたち	あのひとたち	
どのひとたち			

人代名詞に附く接尾語は複數を示すことには關係なく、「わたくしども」は及びませぬ」「あなたがた」はお仕合です」などのやうに、唯語の意味を漠然と言ひ表すために附けることがある。

第三章　數詞

數詞　物事の數量又は序次をいふ語を**數詞**といふ。これを普通數詞・序次數詞の二つに分ける。

普通數詞　「ひとつ」「ふたり」「五冊」「六帖」などのやうに、物事の數量をいふ語を**普通數詞**といふ。

普通數詞は一より十までの間は「ひとつ」「ふたり」「み組」又は「二本」「三ダース」「四脚」などのやうに、固有の語又は外來の語を用ゐるけれども、十一からは多くは外來の語を用ゐる。十一以上で固有の語を用ゐるのは歳を數へるときに用ゐる「はたち」、日を數へるときに用ゐる「はつか」「みそか」ばかりである。

本數詞・助數詞　普通數詞は、「挑燈ひと張」「帶み筋」「鴨ふた番」「半紙三枚」「筆四本」「下駄七足」などのやうに、多くは、專ら數量をいふものと、數量をいふ物事の性質の一斑をいふものとで成り立つて居る。前のを**本數詞**といひ、後のを**助數詞**といふ。

○助數詞には固有のものと傳來のものとがある。固有のものの重なものを示せば、「つ」（物「り」人「か」日「張」弓・挑燈・腰に帶びる刀「振」刀・長刀「一」・「棹」持・竿・竹・長「筋」「一」・「槍」二「一」・「帶」・「羽」鳥・「折」つめたもの・菓子・卵子等を「株」草・「木」・「棟」家・「平」家「二」・「一」・「襲」着物などの疊んだもの・「小袖」三「一」・「組」の重箱・「組」合ふ箸のもの・「番」と雌と・鳥獸の雌・「束」の薪五「一」・「メ」紙十束半・「土」藏「一」・「束」ねたもの・「足」履物・脚絆など兩・「重」重なつたもの・「對」三「一」・「燭」臺「一」・「膳」・「箸」・「双」二つで揃ふもの・「荷」天秤棒でかつぐもの・「着」衣服・洋服三「一」・「把」一「一」・「束」ねたもの・「薪」・「菓」三「一」などである。

固有の助數詞は、多くは固有の本數詞の下に附く。但し「四」「七」は問々「よ（よん）」「なゝ」に呼びかへることがある。

本數詞の下に附く。但し「四」「七」は問々「よ（よん）」「なゝ」に呼びかへることがある。

「ひとりふたり」「みつつよつつ」などのやうに、本數詞・助數詞の結合した、前後のものを重ねたもの、「二三年」「十五六枚」のやうに、前後の本數詞を重ねたものに助數詞をつけたものは、大體の數量をいふに用ゐる。「いくか」「いく枚」「なん通」「なん首」などのやうに、「いく」といふ接頭語又は「なん」といふ語に助數詞を附けたものは、數量の全く不明な

ときに用ゐる。

普通數詞は「ふたりはもう立つた」「三通の手紙が屆いた」といふ文の「ふたり」「三通」などのやうに、體言の役目をすることも多いが、又「林檎が二つなつて居る」「本を三冊讀んだ」といふ文の「二つ」「三冊」などのやうに、副詞のやうな役目をすることも少くない。

普通數詞は「七草」「四季」「五穀」などのやうに、本數詞ばかりを名詞の上に置き、「七つ道具」「三本松」「一軒家」などのやうに、助數詞と一所に名詞の上に置いて、更に一つの名詞を作ることがある。

序次數詞　「ふたつめ」「三番」「五等」「七號」などのやうに、物事の序次をいふ語を**序次數詞**といふ。

序次數詞も、多くは本數詞と助數詞とで成り立つてゐる。それに次の三つの種類がある。

一、「ふたつめ」「四軒め」「三杯め」などのやうに、普通數詞に「め」といふ助數詞をつけたもの。

二、「第一」「第二卷」「第三回」などのやうに、本數詞又はそれに助數詞を附けたものに「第」といふ助數詞を冠らせたもの。

三、「一番」「三等」「四級」「第六號」などのやうに、本數詞に「番」「等」「級」「號」などの助數詞を附けたもの、又はそれに「第」といふ助數詞を冠らせたもの。「番」といふ助數詞を附けたものは、更に「め」といふ助數詞を附けても用ゐる。

○「一の鳥居」「三の卷」「日本一」のやうに、稀に本數詞ばかりで、序次をいふことがある。

「二三軒め」「四五卷め」「いくつめ」「何番」「第何等」などのやうに、序次數詞にも大體の序次又は不定な序次をいふ方法がある。

序次數詞も「一番槍」「一級俸」「二等褒狀」「三號表」「第五師團」などのやうに、名詞の上に置いて、更に一つの名詞を作ることがある。

第四章　動詞

第一節　動詞及び其の活用の種類

動詞　おもに物事の動作をいふ語を**動詞**といふ。

「山が見える」「唱歌が聞える」の「見える」「聞える」は物事の現象をいひ、「書物がある」「犬が居る」の「ある」「居る」は物事の存在をいふ。このやうに物事の現象又は存在をいふものも動詞である。

活用　「行く」といふ動詞は「わたしは行かぬ」「兄が行きます」「京都へ行く」「明日行け」のやうに、「行か」「行き」「行く」「行け」と形を變化し、「起きる」といふ動詞は「まだ起きぬ」「早く起きる」「起きれば食ふ」のやうに、「起き」「起きる」「起きれ」と形を變化する。このやうに語の形を變化するのを**活用**といふ。

四段活用　「書く」といふ動詞は「畫は書かぬ」「畫を書き直す」「畫を書く」「畫を書け」のやうに、語尾を「=か」「=き」「=く」「=け」に變化する。このやうに、五十音の行の四段に亙つて活用するのを**四段活用**といふ。

四段活用の動詞はア行・ザ行・ダ行・ヤ行・ワ行を除いた、他の各行に活用する。

行	語幹	第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形
カ行	書=	=か	=き	=く	=け
ガ行	游=	=が	=ぎ	=ぐ	=げ
サ行	押=	=さ	=し	=す	=せ
タ行	勝=	=た	=ち	=つ	=て
ナ行	死=	=な	=に	=ぬ	=ね
ハ行	縫=	=は	=ひ	=ふ	=へ
バ行	遊=	=ば	=び	=ぶ	=べ
マ行	飲=	=ま	=み	=む	=め
ラ行	織=	=ら	=り	=る	=れ

○文語のナ行變格活用の「死ぬ」及びラ行變格活用の「有り」「居り」は、口語では全く四段活用に移

る。尤も中國・四國・九州の所々では「死ぬ」の活用形「死ぬる」「死ぬれ」の二つ又は一つを存して居る。又「往ぬ」は關東では口語には用ゐぬ。

○文語のサ、行變格活用に屬するもので、口語の四段活用に移るものがある。後を見よ。

上一段活用　「强ひる」といふ動詞は「もう强ひぬ」「酒を强ひる」「强ひれば飲む」のやうに、語尾を「=ひ」「=ひる」「=ひれ」に變化する。このやうに、五十音のイ段に活用し、更にそれに「る」「れ」が添つて活用するのを**上一段活用**といふ。

上一段活用の動詞は五十音圖の總べての行に活用する。

行	語幹	第一活用形	第二活用形	第三活用形
ア行	(射)	い	いる	いれ
カ行	起=	き	きる	きれ
ガ行	過=	ぎ	ぎる	ぎれ
サ行	察=	し	しる	しれ
ザ行	判=	じ	じる	じれ
タ行	朽=	ち	ちる	ちれ
ダ行	閉=	ぢ	ぢる	ぢれ
ナ行	(煮)	に	にる	にれ
ハ行	(干)	ひ	ひる	ひれ
バ行	錆=	び	びる	びれ
マ行	(見)	み	みる	みれ
ヤ行	報=	い	いる	いれ
ラ行	懲=	り	りる	りれ
ワ行	(居)	ゐ	ゐる	ゐれ

○文語の上二段活用の動詞は、口語では此の活用に移る。けれども間々原の活用形を存して居るところもある。九州には殊に多い。

○文語の上一段活用の動詞の「射る」「鑄る」等を、口語でラ行四段活用に用ゐる所が多い。併し「射殺す」「鑄直す」のやうに、場合に依つては尙原の活用形を用ゐて居る。

○文語の四段活用の動詞の「飽く」「借る」「足る」を、關東では多く上一段活用の動詞として用ゐる。

下一段活用　「消える」といふ動詞は「灯が消えた」「灯が消える」「消えれば點ける」のやうに、語尾を「=え」「=える」「=えれ」に變化する。このやうに、五十音圖のエ段に活用し、更にそれに「る」「れ」が添つて活用するのを**下一段活用**といふ。

下一段活用の動詞は五十音圖の總べての行に活用する。

行	語幹	第一活用形	第二活用形	第三活用形
ア行	(得)	え	える	えれ
カ行	負=	け	ける	けれ
ガ行	投=	げ	げる	げれ
サ行	寄=	せ	せる	せれ
ザ行	交=	ぜ	ぜる	ぜれ
タ行	育=	て	てる	てれ
ダ行	撫=	で	でる	でれ
ナ行	重=	ね	ねる	ねれ
ハ行	堪=	へ	へる	へれ
バ行	調=	べ	べる	べれ
マ行	始=	め	める	めれ
ヤ行	消=	え	える	えれ
ラ行	隱=	れ	れる	れれ
ワ行	植=	ゑ	ゑる	ゑれ

○文語の下二段活用の動詞は、口語では全くこの活用に移る。併し、九州では尙ウ段に「る」「れ」の添つた活用形を存して居る。

○文語のカ行下一段活用の動詞「蹴る」は、口語ではラ行四段活用に移る。併し「蹴飛ばす」などのやうに、場合に依つては尙原の活用形を用ゐる。

カ行變格活用　「來る」といふ動詞は「友だちがこぬ」「友だちがきた」「友だちがくる」

「友だちがくればよい」のやうに、語尾を「こ」「き」「くる」「くれ」に變化する。此の活用を**カ行變格活用**といふ。

カ行變格活用の動詞は「來る」といふ語ばかりである。

行	語幹	第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形
カ行	(來)	こ	き	くる	くれ

○文語には「く」といふ活用形があるが、口語にはない。

サ行變格活用　「爲る」といふ動詞は「惡い事はせぬ」「善い事をした」「善い事をする」「善い事をすれば報がある」のやうに、語尾を「せ」「し」「する」「すれ」に變化する。此の活用を**サ行變格活用**といふ。

固有のサ行變格の動詞は「爲る」といふ語ばかりであるが、「噂する」「無くする」「勉强する」などのやうに、他の語に此の語を附けて動詞にしたものは澤山ある。

行	語幹	第一活用形	第二活用形	第三活用形	第四活用形
サ行	(爲)	せ	し	する	すれ

○文語には「す」といふ活用形があるが、口語にはない。

○文語では他の語に「す」を附けて動詞としたものは皆サ行變格活用に屬するが、口語では或者はサ行四段活用に移り、或者はサ行又はザ行上一段活用に移る。例へば「噂する」「飲食する」「無くする」「全うする」「勉强する」「運動する」のやうなのはサ行變格活用に屬するけれども、「賀す」「辭す」「解す」「廢す」「略す」「熟す」「食す」などはサ行四段活用に移り、「察しる」「熱しる」「判じる」「煎じる」「損じる」「培じる」「通じる」「安んじる」「輕んじる」などはサ行又はザ行上一段活用に移る。併し、關西の或地方には尙原の活用を用ゐて居る所がある。

第二節　活用形の名稱

否定形　四段・上一段・下一段・カ行變格活用の動詞の第一活用形、及びサ行變格活用の動詞の第一・第二活用形は「飲まぬ(ない)」「恥ぢぬ(ない)」「受けぬ(ない)」「來ぬ(ない)」「せぬ・しぬ」などのやうに、助動詞の「ぬ」「ない」が附いて打消をいふ形である。此の形を**否定形**といふ。

○「ぬ」「ない」に就いては助動詞の條下に說く。

連用形・中止形・名詞形　四段・カ行變格・サ行變格活用の動詞の第二活用形及び上

一段・下一段活用の動詞の第一活用形は

一、「言ひ直す・言ひにくい」「來馴れる・來よい」「爲損ふ・爲易い」「着飾る・着苦しい」「受け取る・受け易い」などのやうに、用言と結合し、

二、「鳥は歌ひ、蝶は舞ふ」「兄も來、弟も來る」「勉強もし、運動もする」「朝は早く起き、夜は遅く寐る」「風は荒れ、浪は騒ぐ」などのやうに、或事を言ひさし、

三、「光」「讀書」「往來」「報」「長生」「連」「顏見せ」などのやうに、名詞を作る形である。

一を連用形といひ、**二を中止形**といひ、**三を名詞形**といふ。

○中止形は「本を讀み(讀む)、字を書く」「善く勉め(勉める人)、善く遊ぶ人」「顏を洗ひ(洗つて)、髮を撫でつけて」などのやうに、末の動詞の意に從ふべきものである。尤も「茶は飲み、酒は飲まぬ」のやうな場合は此の限でない。

○中止形は記錄には普通に用ゐるけれども、對話には餘り用ゐぬ。多くは「姉は千代といつて、妹は花といふ」「本も讀むし、字も書く」「歌も詠めば、琴も彈く」など、他の表彰法に依る。

○「開き」「擊ち」「起き」「着」「見」「換へ」「交ぜ」などのやうに、單獨では名詞とならぬものも「立聞」「追擊」「早起」「晴着」「高見」「取換」「貼交」のやうに、外の語に添へば、名詞になることが多い。

終止形・連體形　四段・カ行變格・サ行變格活用の動詞の第三活用形、及び上一段・下一段活用の動詞の第二活用形は

一、「花が咲く」「友だちが來る」「仕事をする」「早く起きる」「山が崩れる」の「咲く」「來る」「する」「起きる」「崩れる」のやうに、或事を言ひ切り、

二、「花の咲く春」「友だちの來る時」「仕事をする人」「早く起きる習慣」「山の崩れる音」の「咲く」「來る」「する」「起きる」「崩れる」のやうに、下の體言を形容する形である。

一を終止形といひ、**二を連體形**といふ。

○文語では、四段・上一段・下一段活用の外は、終止形と連體形とが違ふが、口語では、どの活用でも二つの形が同じである。

假定形　四段・カ行變格・サ行變格活用の動詞の第四活用形、上一段・下一段活用の動詞の第三活用形は「都に住めば見聞が廣まる」「友達が來れば一所に遊ぶ」「善いことをすれば報がある」「起きれば食ふ」「善く調べれば分る」の「住め」「來れ」「すれ」「起きれ」「調べれ」のやうに、助詞の「ば」が附いて、假り定めた條件をいふ形である。此の形を**假定形**といふ。

○假定には「雨がつづいたら、線路が斷れよう」「運動すると、丈夫になる」などのやうな表彰法もある。

命令形　四段活用の動詞の第四活用形は、「よく聞け」のやうに、其の儘で命令をいひ、上一段・下一段・カ行變格活用の動詞の第一活用形、及びサ行變格活用の動詞の第一・第二活用形は、「懲り(よ)い(ろ)」「投げ(よ)い(ろ)」「來い」「せ(よ)い・しろ」のやうに、助詞の「よ」「い」又は「ろ」が附いて命令をいふ。此の形を**命令形**といふ。

○「よ」「い」「ろ」に就いては助詞の條下に說く。

以上八つの名稱を五種の活用に當てれば次の通になる。

	語幹	否定形	連用形・中止形・名詞形	終止形・連體形	假定形	命令形
四段活用	書=	=か	=き	=く	=け(ば)	=け
上一段活用	起=	=き	=き	=きる	=きれ(ば)	=き(よ・い・ろ)
下一段活用	明=	=け	=け	=ける	=けれ(ば)	=け(よ・い・ろ)
カ行變格活用	(來)	こ	き	くる	くれ(ば)	こ(い)
サ行變格活用	(爲)	せ	し	する	すれ(ば)	せ(よ・い・ろ)

○以上述べた八つの活用形の名稱は、重な場合を取つて名づけたのであらゆる場合を盡して名づけたのではない。即ち否定形には、いつも「ぬ」「ない」が附くのではなくて、「押さう」「押される」「押させる」のやうに、他の助動詞の附くこともあり、連用形にはいつも用言が附くのではなくて、「押繪(おし)」のやうに體言と結合することもあり、「押します」「押した」「押して」「押しながら」のやうに辭の附くこともある。又終止形・連體形はいつも言ひ切つたり、體言が附いたりするばかりではなくて、「押すまい」「押すだらう」「押すな」「押すか」のやうに辭の附くこともある。かやうな場合でも、其の意味はどうであつても、否定形・連用形・終止形・連體形といふ名稱で、これを代表させるのである。

第三節　語尾の音便

音便　發音の便宜上、音の轉ずるのを**音便**といふ。今、動詞の語尾が辭に連なる上から起る音便を分けると、次の三つになる。

イ音便　「お話を聞い(キ)て、感心しました」「花が咲い(キ)た」「急い(キ)で來たまへ」「一日(イチニチ)

舟を漕い‖(ギ)だ」などのやうに、カ行・ガ行四段活用の動詞の連用形「=き」「=ぎ」は辭の「て」「ても」を「た」「たり」を含むが附くときには、轉じて「=い」になる。これを**イ音便**といふ。ガ行四段活用の動詞の連用形がイ音便を起すときには「て」「た」は「で」「だ」になる。

○「行く」がカ行四段活用でありながら「行つ‖て」「行つ‖た」と促音になるのは特例である。

○愛知・岐阜・福井・石川・富山・岡山・鳥取・島根・徳島・福岡其の他の所々には「指い‖(シ)て」「出い‖(シ)た」などのやうに、サ行四段活用の動詞の連用形「=し」にもイ音便又は音便エを起す。けれども、これはサ行四段活用の少數の動詞に限つて居る。

撥音便　「死ん‖(ニ)で、お佗を致します」「七十で死ん‖(ニ)だ」「二階から飛ん‖(ビ)で下りた」「荷車で運ん‖(ビ)だ」「雨が止ん‖(ミ)で虹が出た」「史記を讀ん‖(ミ)だ」などのやうに、ナ行・バ行・マ行四段活用の動詞の連用形「=に」「=び」「=み」は辭の「て」「た」が附くときには、轉じて「=ん」になる。これを**撥音便**といふ。

ナ行・バ行・マ行四段活用の連用形が撥音便を起すときには「て」「た」は轉じて「で」「だ」になる。

○山口・高知・九州の大部、其の他の所々では「呼う‖(ビ)で」「飛う‖(ビ)だ」「揉う‖(ミ)で」「飲う‖(ミ)だ」のやうに、「=び」「=み」をウ音便にいふ。けれども話に依つて、かう言ふのと言はぬのとある。

促音便　「一寸待つ‖(チ)て下さい」「戰爭に勝つ‖(チ)た」「言つ‖(ヒ)て見給へ」「筆を買つ‖(ヒ)た」「當つ‖(リ)て碎ける」「善いのを取つ‖(リ)た」などのやうに、タ行・ハ行・ラ行四段活用の動詞の連用形「=ち」「=ひ」「=り」は辭の「て」「た」に附くときには轉じて「=つ」になる。これを**促音便**といふ。

○ハ行四段活用の動詞の連用形を促音便に言ふのは、富山・石川・福井・滋賀・三重の東境から以東に多い。以西では「言うて」「買うた」のやうに、ウ音便にいふ。

第四節　敬讓動詞

敬讓動詞　動詞には其の儘でも動作を敬ひ、動作を謙り、又は存在を丁寧にいふものがある。其の主なものを擧げれば次の通である。

一、動作を敬つていふもの。

あそばす(する)　　おぼしめす(思ふ)

めす(呼ぶ、着る、乘る、穿く、買ふ)　　あがる(食ふ、飲む)

めしあがる(食ふ、飲む)　　いらつしやる(居る、來る、行く)
おつしやる(言ふ)　　なさる(する)
くださる(くれる)

右の中で「なさる」よりは「あそばす」、「あがる」よりは「めしあがる」の方が丁寧である。

○右の外「おいで(=あそばす、=なさる)」「おこし(=あそばす、=なさる)」「おひろひ(=あそばす、=なさる)」「おかくれ(=おそばす、=なさる)」「御覽(=あそばす、=なさる)」「御免(=あそばせ、=なさい)」など助動詞を伴つて、動作を敬ふ意を表すものがある。但し其の儘でも「おいで」「おこし」「おひろひ」「おかくれ」は名詞として用ゐられ、「御覽」「御免」は名詞又は命令に用ゐられる。

二、動作を謙つていふもの。

いただく(貰ふ、食ふ、飲む)　　いたす(する)
まうす(言ふ)　　あがる(訪問する、行く)
うけたまはる(聞く)　　つかまつる(する)
まゐる(行く、來る)　　うかがふ(訪問する、問ふ)
あげる(やる)　　さしあげる(やる)

まうしあげる(言ふ)　　たべる(食ふ)
ぞんずる(知る、思ふ)

右の中で「あげる」よりは「さしあげる」、「まうす」よりは「まうしあげる」、「いたす」よりは「つかまつる」の方が丁寧である。

此の二の種類に「お目にかかる(會ふ)」「お目にかける(見せる)」「御覽に入れる(見せる)」「御用立てる(貸す)」などのやうに、句で動作を謙る意を表すものもある。

○右の外「拜見」「拜借」「頂戴」などは「する」「いたす」を附けて動作を謙る意を表す。間々其の儘でも用ゐることがある。

三、存在を丁寧にいふもの。

ござる(ある)

○第一種にも「ござる(來る、居る)」といふのがあるが、普通には用ゐぬ。こゝのも助動詞の「ます」を添へたもの丶外はあまり用ゐぬ。

活用　敬讓動詞の中で、第一種の「あそばす」「おぼしめす」「めす」「あがる」「めしあがる」、第二種の「いただく」「いたす」「まうす」「あがる」「うけたまはる」「つかまつる」「まゐる」「うか

がふ」は四段に活用し、第二種の「あげる」「さしあげる」「まうしあげる」「たべる」は下一段に活用し、第二種の「ぞんする」はサ行變格に活用する。

第一種の「いらつしやる」「おつしやる」「なさる」「下さる」はラ行四段に活用するが、其の連用形「=り」に助動詞の「ます」が附くときには音便で「=い」になる。「=い」になつたものは命令にも用ゐる。

○東京では「入らつしやる」に辭の「て」「た」の附いた「入らつしやつ(=て、=た)」を「入らつしつ(=て、=た)」ともいひ、「なさる」「下さる」に辭の「て」「た」の附いた「なさつ(=て、=た)」「下さつ(=て、=た)」を「なつ(=て、=た)」「下つ(=て、=た)」ともいふ。

第三種の「ござる」もラ行四段に活用するが、連用形(助動詞の「ます」の附く形)の外は餘り用ゐぬ。「ます」が附くときには音便で「=い」になることが多い。

第五節　動詞の性

自動詞　「子供が泣く」「犬が走る」の「泣く」「走る」といふ動詞は、それだけで「子供」「犬」といふ主語(動作者)の叙述を完うし、「子が親に仕へる」「矢が的に中る」の「仕へる」「中る」といふ動詞は、それに「子」「矢」といふ主語(動作者)の叙述を完うする。「泣く」「走る」のやうな動詞を**完全自動詞**といひ、「仕へる」「中る」のやうな動詞を**不完全自動詞**といひ、總稱して、**自動詞**といふ。

他動詞　「人が犬を打つ」「風が木を倒す」の「打つ」「倒す」といふ動詞は、それに「犬」「木」といふ、動作を受けるものを補つて、「人」「風」といふ主語(動作者)の叙述を全うし、「教師が生徒に文法を教へる」「母が子供に菓子をやる」の「教へる」「やる」といふ動詞は、それに「生徒」「子供」といふ、動作の落ち着くものと、「文法」「菓子」といふ、動作を受けるものとを補つて、「教師」「母」といふ主語(動作者)の叙述を完うする。「打つ」「倒す」のやうな動詞を**完全他動詞**といひ、「教へる」「やる」のやうな動詞を**不完全他動詞**といひ、總稱して、**他動詞**といふ。

補語・客語　前の例の「親」「的」「生徒」「子供」のやうに、不完全自他動詞の動作の落ち着く物事をいふ語を**補語**といひ、「犬」「木」「文法」「菓子」のやうに、他動詞の動作を受ける物事をいふ語を**客語**といふ。

動詞には自動詞と他動詞と對になつて、活用の行の同じものがある。其の中に

も(イ)活用の同じものがあり、(ロ)活用の違ふものがある。

(イ)の例

風が吹く(四段)……火を吹く(四段)

目が閉ぢる(上一段)……本を閉ぢる(上一段)

夜が明ける(下一段)……戸を明ける(下一段)

(ロ)の例

足が向く(四段)……顔を向ける(下一段)

紙が裂ける(下一段)……着物を裂く(四段)

動詞には又自動詞と他動詞とが對になつて、活用の行の違ふものがある。其の中にも(イ)語幹に「る」又は「れる」が附いて自動詞になり、「す」又は「せる」が附いて他動詞になるものがあり、(ロ)他動詞の語尾の、ア段(稀にオ段)の音に轉じたものに「る」又は「れる」が附いて自動詞になるものがあり、(ハ)自動詞の語尾のア段(稀にウ段・オ段)に轉じたものに「す」(稀に「かす」)が附いて他動詞になるものがある。

(イ)の例

人が通る(四段)……風を通す(四段)

舟に乗る(四段)……車に荷物を載せる(下一段)

水が流れる(下一段)……芥を流す(四段)

(ロ)の例

出口を塞ぐ(四段)……穴が塞がる(四段)

藁を積む(四段)……雪が積る(四段)

酒に水を交せる(下一段)……米に砂が交る(四段)

森を分ける(下一段)……道が分れる(下一段)

(ハ)の例

木の葉が動く(四段)……石を動かす(四段)

女が笑ふ(四段)……人を笑はかす(四段)

盗人が逃げる(下一段)……雀を逃す(四段)

期限が延びる(上一段)……絲を延ばす(四段)

願が許りる(上一段)……願を許す(四段)

汽車から下りる（上一段）……荷物を下す（四段）

このやうに、動詞には自動詞と他動詞と對になつて居るものが多いけれども、總べてがさうなのではなくて、自動詞があつて、其の對になる他動詞のないのもあり、又他動詞があつて、其の對になる自動詞のないものもあるのである。

第五章　形容詞

第一節　形容詞及び其の活用

形容詞　おもに物事の有樣をいふ語を**形容詞**といふ。

「品が惡い」「冷い水」の「惡い」「冷い」は物事の性質をいひ、「おう、くやしい」「嬉しい事」の「くやしい」「嬉しい」は物事の感情をいふ。形容詞には物事の有樣をいふ外に、性質・感情をいふものもある。

活用　「高い」といふ形容詞は、「山は高く、海は深い」「山は高い」「あまり高ければ登れまい」のやうに、語尾を「ーく」「ーい」「ーけれ」に變化する。形容詞の活用は唯此の一種ばかりである。

語幹	第一活用形	第二活用形	第三活用形
高ー 險しー	ーく	ーい	ーけれ

○文語では、久活志久活の別があつて、語尾に「し」のあるのとないのとがあるが、口語では一様になつてゐる。「險しい」「新しい」「美しい」のやうに、語尾の「い」の上に「し」のあるのは、文語では志久活の形容詞である。

語幹　形容詞の語幹には次のやうな、いろ〳〵な用法がある。

一、「あ、痛」「おう、嬉し」などのやうに、感歎の意を含めて終止に用ゐることがある。

二、「赤」「黑」などのやうに、獨立して、又は「遠淺」「足弱」などのやうに他の語の下に附いて、名詞になることがある。

三、「重み」「可笑しみ」「長さ」「珍しさ」などのやうに、接尾語の「み」「さ」が附いて名詞になることがある。

四、「寒さうに」「可笑しさうな」などのやうに、さう(=に、=な等)が附いて、後に所謂形容動詞を作ることがある。

○語幹の一音のものに「さう(=に、=な等)」が附くときは「よさそうに」「なさそうな」のやうに、「さ」が加はる。

五、「暑がる」「苦しがる」などのやうに、接尾語の「がる」が附いて動詞になることがある。

六、「長話」「嬉し涙」「近寄る」「遠退く」「薄暗い」「細長い」などのやうに、他の語と結合することがある。

第二節　活用形の名稱

中止形・副詞形　第一活用形は

一、「山は高く、海は深い」の「高く」のやうに、或事をいひさし、

二、「山が高く聳えて居る」の「高く」のやうに、副詞として用ゐる形である。

一を**中止形**といひ、**二**を**副詞形**といふ。

副詞形の「=く」は「あの山は高うございます」「路が險しうございます」などのやうに、下に「ございます」が來るときには、音便で「=う」になる。

○關西地方では副詞形の「=く」を、いつでも「=う」にいふ。

○動詞の「ある」は副詞形に直接には附かぬ。「高くある」「險しくある」とはいはないで、唯「高い」「險しい」といふ。

○「遠くが見える」「近くにある」の樣に、副詞形を名詞として用ゐる事がある。

副詞形に「て」「ても」を含むが附くときには、「高くつて」「險しくつて」のやうに、多くは促音が伴ふ。

終止形・連體形　第二活用形は

一、「山が高い」の「高い」のやうに、或事を言ひ切り、

二、「高い山」の「高い」のやうに、下の體言を限定する形である。

一を**終止形**といひ、二を**連體形**といふ。

○「同じ」は終止形・連體形に「同じい」とはいはぬ。

○文語の終止形「よし」「なし」は「お心よし」「骨なし」「文なし」のやうに、名詞に用ゐることがある。又「なし」は「相手なしに喋る」「仕方なしに行く」のやうに、上に名詞が附き、下に「に」といふ接尾語が附いて、副詞になることがある。

假定形　第三活用形は「餘り高ければ登れぬ」の「高けれ」のやうに、助詞の「ば」が附いて、假り定めた條件をいふ形である。此の形を**假定形**といふ。

以上五つの名稱を活用に當てれば次の通になる。

語幹	中止形・副詞形	終止形・連體形	假定形
高=	=く	=い	=けれ（ば）

第三節　形容動詞

形容動詞　前節に述べた形容詞のやうに、物事の有樣をいふもので、しかも之れと違つた活用をする語を**形容動詞**といふ。これに左の三種ある。

第一種の形容動詞　第一種の形容動詞は「あの山は高からう」「あすこは高かりさうだ」のやうに「=から(う)」「=かり」と活用するものである。「=から(う)」は推量形、「=かり」は連用形である。推量形とは助動詞の「う」が附いて、推量を表す形をいふ。連用形の「=かり」は助動詞の「た」「り」を含むが附くときには「高かつた」のやうに促音便を起す。

○此の種の形容動詞はもと形容詞の副詞形「=く」と「あり」との熟合したもので、文語ではラ行變格に活用するが、口語ではかくの如く「=から」「=かり」の形しかない。尤も「よかれ」「あしかれ」「遲かれ」「早かれ」などのやうに對にいふときに限つて、「=かれ」といふ命令形を用ゐることがある。

前節の形容詞には推量形・連用形がなく、此の種の形容動詞には他の形がないから、同系の形容詞のやうになつて、互に補ひ合つて居る。

第二種の形容動詞　第二種の形容動詞は「靜だ」「靜です」のやうに、「=だ」「=です」を履むもので、「夜は靜だらう」「昔は靜だつた」「こゝは靜で、あすこは賑だ」「今も靜だ」のやうに、「=だら(う)」「=だつ(た)」「=で」「=だ」と活用し、「夜は靜でせう」「昔は靜でした」「こゝは靜で、あすこは賑です」「今も靜です」のやうに、「=でせ(う)」「=でし(た)」「=で」「=です」と活用するのである。「=だら(う)」「=でせ(う)」は推量形、「=だつ(た)」「でし(た)」は連用形、「=で」は中止形、「=だ」「=です」は終止形である。

○「靜だ」「賑です」のやうな形容動詞を「正成は忠臣だ」「鯨は獸類です」のやうな名詞に指定の助動詞の附いたものと混じてはならぬ。「忠臣だ」「獸類です」の「忠臣」「獸類」は名詞であるから、これに「が」「の」「に」「を」「と」「へ」「から」「まで」等の助詞が附くが「靜だ」「賑です」の「靜」「賑」は名詞でないから、それが附かぬ。又「忠臣だ」「獸類です」には連體形の用言又は體言に「の」の附いたものを上に附けて「珍しい忠臣だ」「南朝の忠臣だ」「游ぐ獸類です」「海の獸類です」のやうにはいへるが、副詞を附けることは出來ず「靜だ」「賑です」には副詞を附けて「大層靜だ」「よほど賑です」のやうにはいへるが、連體形の用言又は體言に「の」の附いたものを附けることはできぬ。此等で區別するがよい。總べて、第二種の形容動詞は其の語尾を「に」にいひかへれば副詞となるべきものである。

○「靜だ」のやうに「=だ」を履むものは「=である」の約轉であり、「賑です」のやうに「=です」を履むものは「=であります」の約轉である。

此の種類の形容動詞の中、「=だ」を履むものは通常の表彰法で「=です」を履むものは丁寧な表彰法である。此の外、普通の表彰法には「=で、ある」を履むものがあり、丁寧な表彰法には「=で、ございます(で、ございます)」を履むものがある。「=で、ございます(で、ございます)」を履むものは「=です」を履むものよりも一層丁寧である。

○「=で、ある」は記錄に用ゐて、對話には用ゐぬ。

第三種の形容動詞　第三種の形容動詞は「靜なら移らう」「靜に歩む」「靜な所」のやうに、「=なら」「=に」「=な」と活用するものである。「=なら」は假定形、「=に」は副詞形、「=な」は連體形である。

○此の種の形容動詞の活用形「なら」「な」は「=に」を履む副詞と「あり」との熟合したものの殘物で、

文語ではラ行變格に活用する。

○「=なら」は「靜かならば移らう」のやうに「ば」が附いて假定をいふこともある。

第二種の形容動詞には、連體形と假定形とがなく、此の種の形容動詞には他の形がないから、同系の形容動詞のやうになつて、互に補ひ合つて居る。

語幹	推量形	連用形	副詞形	中止形	終止形	連體形	假定形
靜=	=だら(う)	だつ(た)	○	=で	=だ	○	○
	=でせ(う)	でし(て)(た)	○	=で	=です	○	○
	○	○	=に	○	○	=な	=なら

第四節　指示形容詞

指示形容詞　「この」「その」「あの」「どの」「こんな」「そんな」「あんな」「どんな」といふ語は、體言の上に附いて之を形容するに用ゐる。これらを**指示形容詞**といふ。

○「=この」「=その」「=あの」の「こ」「そ」「あ」は昔は獨立の代名詞として用ゐられたのであるが、今は必ず「の」を伴ふ。

○「こんな」「そんな」「あんな」「どんな」は「このやうな」「そのやうな」「あのやうな」「どのやうな」の約まつたのである。

第六章　副詞

副詞　おもに用言を限定するものを**副詞**といふ。

「もつとゆつくり話せ」「あの馬は大層早く走ります」の「もつと」「大層」は他の副詞「ゆつくり」「早く」を限定する。副詞はこのやうに他の副詞をも限定する。

○副詞は「綺麗に出來る」「一番善く出來る」のやうに、限定する語のすぐ上に置くことが多いけれども、「昨日東京へ着きました」「暫く友達の來るのを待たう」のやうに、幾つかの語を隔てゝ上に置くことも少くない。

副詞には用言又は他の副詞を限定するばかりでなく、時としては「たつた半日の路だ」「僅三圓の金ではないか」などのやうに體言を限定し、「明日は丁度日曜日だ」「まるで猫のやうですね」などのやうに、用言以外の叙述に用ゐられる語句を限定し、又「一體どうするつもりだらう」「畢竟平生の心掛が惡いからだ」などのやうに、下の全文を限定するものもある。

第七章　接續詞

接續詞　語・句又は節を接續する語を**接續詞**といふ。これに次の四種ある。

第一種は「および」「また」「なほ」「さうして」「それから」「それに」「そのうへ」などのやうに、物事を累加するに用ゐるものである。

英・佛・獨および米の四箇國を漫遊して歸りました。

山を越え、また川を渡つて來ますと、廣い野原へ出ました。

手紙でも言つてやつたが、なほ會つても話すつもりだ。

明日汽車で神戸に行かう。さうして、船を待ち合はさう。

昨日は、淺草へもまゐりましたし、それから向島へもまゐりました。

雨が降る。（それに／そのうへ）風も吹く。

「さうして」は「そして」と約めても用ゐる。

第二種は「または」「それとも」などのやうに、物事を選擇するに用ゐるものである。

支出の多いのは海軍又は陸軍だらう。

あなたは入らつしやいますか。それとも入らつしやいませぬか。

第三種は「それで」「それだから」「それですから」「それなら」「それでは」「そこで」「さうすると」「さうしたら」「さうすれば」「隨つて」などのやうに、上の事柄と其の事柄から起つた當然の結果とを接續するに用ゐるものである。

試驗が近くなつた。（それで／それだから）なか〳〵忙しい。

試驗が近くなりました。（それで／それですから）なか〳〵忙しうございます。

愈、他言しませんか。（それなら／それでは）お話しいたしませう。

時鳥が一聲鳴いて行つた。そこで、一首詠んだ。

ゆふべ、うちの犬が鳴いた。（さうすると／さうしたら）よその犬も鳴きだした。

君も來てくれたまへ。さうすればあれも來るだらう。

此の頃は氣候が不順だ。隨つて病人も多い。

「それで」「それだから」「それですから」「それでは」「さうすると」「さうすれば」は「それ」又は「さう」を略して、「で」「だから」「ですから」「では」「すると」「すれば」としても用ゐる。又「それなら」は音便で「そんなら」ともいふ。

第四種は「それだけれども」「それですけれども」「それだが」「それですが」「それに」「それのに」「それだのに」「それですのに」「しかし」「しかしながら」「もつとも」などのやうに、上の事柄と其の事柄から起る、反對の事柄とを接續するに用ゐるものである。

あの人は此の村中での金滿家だ。（それだけれども／それだが）貧民を助けてはくれぬ。

あの人は此の村中での金滿家です。（それですけれども／それですが）貧民を助けてはくれませぬ。

おつかさんは病氣で伏せつて居るさうだ。（それに／それのに／それだのに）毎日出歩いてばかり居る。

おつかさんは病氣で伏せつて居るさうです。（それに／それのに／それですのに）毎日出歩いてばかり居ります。

あなたは、さう仰つしやるが、それでも事實は違ひます。

やう〳〵秋になりました。しかし（しかしながら）衞生を怠つてはなりませぬ。

明日の會には出席いたします。もつとも、雨天だつたら、どうするか分りませぬ。

「それだけれども」「それですけれども」「それだが」「それですが」「それでも」などは「それを略して、「だけれども」「ですけれども」「だが」「ですが」「でも」として用ゐることがある。

第八章　感歎詞

感歎詞　感動したときに發する聲を**感歎詞**といふ。例へば左の通である。

あゝ、いたい。

おう、こはい。

まあ、見事だこと。

やあ、しくじつた。

おや、さうですか。

右の、外警戒を表すもの、挑唆を表すもの、誘起を表すもの、應答を表すものなどがある。尙數例を擧げて見よう。

これ（こら）何をして居る。

それ（そら）そこに在る。

ほら、拔いたぞ。

あれ、汽車が來た。

やい、貴様はよくも人を騙したな。
おい、君、どこへ行く。
もし、あなたは河村さんですか。
えい、火事ですか。
どれ(どりや)、とりかゝらう。
さあ、まゐりませう。
はい、さやうでございます。
いや、さうではない。いえ(いゝえ)、さうではございませぬ。
なるほど、さうだらう。

第九章　助動詞

助動詞　おもに動詞に附いて其の叙述を助ける辭を**助動詞**といふ。

「日本は世界の公園だ」「それはあなたが惡いのです」の「だ」「です」のやうに、體言又は體言に準じて用ゐられた語句に附き、「まるで猫のやうだ(＝です)」の「やうだ(＝です)」のやうに、助詞の「の」を介して名詞に附くものがある。箇樣なのも亦助動詞である。

「正成は忠臣である」「雨が降つてゐる」の「である」「てゐる」等は二つ以上の語辭が集つて助動詞と同じ作用をする。箇樣なのも助動詞に準じて此の章で說明する。

第一節　所動の助動詞

能動・所動　「風が吹く」「鷹が雀を捕る」の「吹く」「捕る」のやうに、動作者(主語)の自分でする動作を**能動**といひ、「子守が子供に泣かれる」「馬子が馬に蹴られる」の「泣かれる」「蹴られる」のやうに、或物事(主語)が受ける動作を**所動**といふ。

所動の動詞は其の主語に對する叙述を全うする爲に補語を要する。之を**所動**

の補語と云ふ。所動の補語は能動の動作者(主語)の位置を轉じたものである。例へば、

イ、子供が泣く。(能)
　子守が子供に泣かれる。(所)

ロ、子供が母に縋る。(能)
　母が子供に縋られる。(所)

ハ、馬が馬子を蹴る。(能)
　馬子が馬に蹴られる。(所)

ニ、母が娘に袷を着せる。(能)
　娘が母に袷を着せられる。(所)

所動の助動詞　所動の動詞を作るには、四段活用の動詞の否定形に「れる」、他の活用の動詞の否定形に「られる」をつける。例へば、

(四)　書かれる
　(上一)起き

(下一)明け
　(カ變)來
　(サ變)し

られる
せ

「れる」「られる」を**所動の助動詞**といふ。

サ行變格活用の動詞に「られる」が附くときには、多くは活用形の「せ」と「られる」の「ら」とが約まつて「さ」になる。例へば、

せられる――さる
打擲せられる――打擲される

○サ行變格活用の動詞の語尾「せ」と「られる」とが約まつて「される」となることは全國の大部がさうであるが、西國地方には間々原形に云ふ所がある。

所動の助動詞の活用は動詞の下一段活用と同じである。但し、名詞形を缺く。

否定形	中止形 連用形	終止形 連體形	假定形	命令形
れ	れ	れる	れれ(ば)	れ(いろ)(よ)

られ	られ	られる	られれ(ば)　られ(よ)(い)(ろ)

○九州地方では、多くは「れる」「れれ」を「るる」「るれ」といひ、「られる」「られれ」を「らるる」「らるれ」といふ。

第二節　勢動の助動詞

勢動　「むづかしいけれども讀まれる」「古いけれども、まだ着られる」の「讀まれる」「着られる」のやうに、動作者のすることが出來る動作を**勢動**といふ。

勢動の動詞は勢動の補語を要せぬ。

勢動の助動詞　勢動の動詞を作るには、所動の動詞を作るやうに、四段活用の動詞の否定形に「る」、他の動詞の否定形に「られる」を附ける。「れる」「られる」を**勢動の助動詞**といふ。

四段活用の動詞に「れる」が附くときには、語尾と「れる」の「れ」とが約まつてエ段の音になる。例へば、

書かれる――書ける

游がれる――游げる
押される――押せる
勝たれる――勝てる
死なれる――死ねる
言はれる――言へる
飛ばれる――飛べる
讀まれる――讀める
取られる――取れる

サ行變格活用の動詞に「られる」が附くときには、多くは、所動の助動詞の場合と同じやうに、語尾の「せ」と「られる」の「られ」とが約まつて「さ」となる。

○下一段活用の動詞「受く」「負く」に「られる」が附いて「受けられる」「負けられる」と云ふ場合を「試驗が受かつた」「もつと負からないか」などのやうに「受かる」「負かる」と云ふことがある。四段に活用する。

勢動の助動詞の活用は所動の助動詞の活用と同じである。但し、命令形を缺く。

勢動の動詞は「春が待たれる」「行末が思ひやられる」「父母のことが案じられる」のやうに、自然に起る動作を表すことがある。

第三節　令動の助動詞

令動　「教師が生徒に文を作らせる」「義經に義仲を攻めさせる」の「作らせる」「攻めさせる」のやうに、或物事(主語)が動作者にさせる動作を**令動**といふ。

令動の動詞は其の主語に對する叙述を全うする爲に、客語又は補語を要する。之を**令動の客語**又は**令動の補語**といふ。令動の客語は多くは自動詞の動作者(主語)が其の位置を轉じたもので、令動の補語は多くは他動詞の動作者(主語)が其の位置を轉じたものである。

イ
- 犬が走る。(能)
- 人が犬を走らせる。(令)
- 子供が車に乘る。(能)
- 人が子供を車に乘らせる。(令)

ロ
- 生徒が文を作る。(能)
- 教師が生徒に文を作らせる。(令)
- 兄が弟に財産を讓る。(能)
- 父が兄に弟に財産を讓らせる。(令)

令動の助動詞　令動の動詞を作るには、四段活用の動詞の否定形に「せる」、他の活用の動詞の否定形に「させる」を附ける。例へば、

(四)　書か　せる
(上一)起き
(下一)明け　させる
(カ變)來
(サ變)し

「せる」「させる」を**令動の助動詞**といふ。

サ行變格活用の動詞に「させる」が附くときには活用形の「=せ」と「させる」の「さ」とが約まつて「さ」となることが多い。例へば、

せさせる――――させる
退學せさせる――――退學させる

令動の助動詞の活用は動詞の下一段活用と同じである。但し名詞形を缺く。

否定形	中止形 連用形	終止形 連體形	假定形	命令形
せ	せ	せる	せれ（ば）	せ（ろ）（いよ）
させ	させ	させる	させれ（ば）	させ（ろ）（いよ）

○九州地方では「せる」「させる」を「する」「さする」と云ふ。又他の地方には之に四段の活用を交へる所がある。殊に連用形に「て」「た」の附くときには「書かして（た）」「起きさして（た）」などと云ふ所が多い。

令動に所動の助動詞を連ねれば、「友達に酒を飲ませられる（飲まされる）」「生徒が校長に退學せさせられる（退學させられる）」のやうに、動作者が或事物にさせられる動作を表す。

第四節　敬讓の助動詞

動詞に動作を敬ひ、又は謙るものゝあることは既に述べた所であるが、普通の動詞は助動詞を伴つて、此等の意を表すのが常である。即ち左の通である。

敬讓の助動詞　普通の動詞が動作を敬ひ、又は謙る意を表すには、次のやうな種々の仕方がある。

一、動作を敬つていふには、

イ、四段活用の動詞の否定形に、所動の助動詞の轉じた「れる」、他の活用の動詞の否定形に「られる」を附ける。例へば、

善く字を書かれる。
朝早く起きられる。
お嬢さんにお召物を着せられる。
きつと來られる。
會に出席せられる。（出席される）

ロ、動詞の連用形に接頭語の「お」を冠らせたもの（或名詞又は、或二字以上の漢語に「お」又は「御」を冠らせたもの）に、敬讓動詞から轉じた「なさる」「あそばす」を附ける。例へば、

新聞をお讀み（なさる。あそばす。）

二階からお下り（なさる。あそばす。）

大事にお育て（なさる。あそばす。）

兄さんの事をお噂（なさる。あそばす。）

學事を御視察（なさる。あそばす。）

○カ行變格活用の動詞「來る」、サ行變格活用の動詞「爲る」には「いらつしやる」「なさる」「あそばす」と云ふ特別の敬讓動詞があるから、「お」を冠らせて「なさる」「あそばす」を附けることをせぬ。

○動作を敬つていふ敬讓動詞の「めす」「あがる」に「お」を冠らせて「なさる」「あそばす」を附けたものは敬意が更に深い。

○動作を謙つていふ敬讓動詞の「いただく」「まゐる」「うかがふ」「あげる」「たべる」などに「お」を冠らせ「ぞんずる」に「御」を冠らせて「なさる」「あそばす」をつければ動作を敬つていふに用ゐる。

○「なさる」は「字を書きなさる」「早く起きなさる」「着物を着せなさる」「きつと來なさる」「何かしなさる」「會に出席なさる」のやうに、「お」を冠らせないですべての活用の連用形又は二字の漢語に附くことがある。但し敬意は薄い。

「新聞をお讀みになる」「二階からお下りになる」「學事を御視察になる」などのやうに「なさる」「あそばす」の附くものと同じ形に「に、なる」を附けたものも動作を敬つていふに用ゐる。

又「下々の者をお恵みくださる」「今日の會に御出席くださる」「御祕藏の本を貸してくださる」のやうに「なさる」「あそばす」の附くものと同じ形に「くださる」、同じ形の「お」又は「御」を冠らせぬものに「て、くださる」を附けたものは、他人の、自分又は他の人に仕向ける動作を敬ふに用ゐる。

二、動作を謙つていふには、動詞の連用形に「お」を冠らせたもの（或名詞に「お」を冠らせたもの及び或二字以上の漢語又は之に「お」又は「御」を冠らせたもの）に敬讓動詞から轉じた「まうす」「いたす」又は「つかまつる」を附ける。

先生をお招き（まうす。いたす。つかまつる。）

あなたをお恨みまうす。
宅でお待ち受け（まうす。いたす。つかまつる。）
先生のお噂（まうす。いたす。つかまつる。）
私が御案内（まうす。いたす。つかまつる。）
私も賛成（まうす。いたす。つかまつる。）

○カ行變格活用の動詞「來る」、サ行變格活用の動詞「する」には「まゐる」「いたす」「つかまつる」といふ特別の敬讓動詞があるから、「お」を冠らせて「まうす」「いたす」「つかまつる」を附けることをせぬ。

○敬讓動詞の動作を謙つていふ「うかがふ」「あげる」などに「お」を冠らせて「まうす」「いたす」「つかまつる」を附けたものは、謙る意が更に深い。

三、動作を丁寧にいふには、動詞の連用形に「ます」を附ける。

暫く休みます。
かんざしが落ちます。
此の小刀はよく切れます。
人が來ます。
きつと出席します。

一・二の敬讓の助動詞又は之に準ずべきものは多くの場合にはこの「ます」を伴ふ。

本を讀まれます。
お次に控へられます。
お友だちとお遊びなさいます。
字をお書きあそばします。
今夜の十時にお着きになります。
珍らしい物をお見せくださいます。
氣をつけて、お育てまうします。
お庭を拜見いたします。

お食事のお相伴つかまつります。

以上の「れる」「られる」「なさる」「あそばす」「くださる」「まうす」「いたす」「つかまつる」「ます」を**敬讓の助動詞**といふ。

敬讓の助動詞の中で「れる」「られる」は所動の助動詞と同じやうに活用し、「なさる」「あそばす」「くださる」「まうす」「つかまつる」は敬讓動詞と同じやうに活用する。

「ます」は「まだ讀みませぬ」「どうぞお讀みなさいませ」「もう讀みました」「本を讀みます」「讀んでいらつしやいます御本は何でございますか」「本を讀みますれば分りませう」の「ませ」「まし」「ます」「ますれ」のやうに活用する。「ませ」は否定形・命令形、「まし」は連用形、「ます」は終止形・連體形、「ますれ」は假定形である。

否定形	連用形	終止形・連體形	假定形	命令形
ませ	まし	ます	ますれ（ば）	ませ

○否定形に「ない」は附かぬ。命令形の「ませ」は「まし」ともいひ、終止形・連體形の「ます」は「まする」ともいふ。

命令形の「ませ」「又は」「まし」は動作を敬つていふ敬讓動詞及び「なさる」「あそばす」「くださる」といふ敬讓の助動詞の下にばかり附く。

こちらへいらつしやいませ。

洋服をおめしなさいませ。

字をお書きなさいませ。

新聞をお讀みあそばしませ。

明日の會に御出席くださいませ。

○「お」を冠らせないで「なさる」をつけたものの下には「ませ」は附かぬ。

動作を敬つていふ敬讓動詞、及び「なさる」「あそばす」「くださる」の下に「ませ」「又は」「まし」を附けたものは、命令の、もつとも鄭重な表彰法である。「こちらへいらつしやい」「字をお書きなさい」「新聞をお讀みあそばせ」「明日の會に御出席ください」のやうに、動作を敬つて云ふ敬讓動詞の命令形、及び其の他の動詞の連用形に「お」を冠らせたものに「あそばせ」「なさい」「ください」を附けたものなどが之に次ぐ。

又「字をお書き」「早くお起き」「ちよつとお見せ」「さつさとおし」などのやうに、動詞の

連用形に「お」を冠らせたものも命令に用ゐる。これは助動詞の附いたものより敬意が薄い。

○「字を書きな」「早く起きな」「それを見せな」「こちらへ來な」「何かしな」のやうに、動詞に「お」を冠らせないものに「な」の附いたものも命令に用ゐることがある。これは敬意がずつと薄い。

○「字を書きたまへ」「早く起きたまへ」「ちよつと見せたまへ」などのやうに、動詞の連用形に「たまへ」といふ助動詞を附けて、命令に用ゐることがある。「給ふ」は四段活用の動詞であるが、口語の助動詞では唯此の命令形ばかりを用ゐる。

第五節　指定の助動詞

指定の助動詞　「鯨は獸類だ(です)」「鷗の飛ぶやうなのは白帆が走るのだ(です)」のやうに、名詞又は體言に準じて用ゐられた語句に「だ」「です」の附いたものは事柄を指定して解說するに用ゐる。「だ」「です」を**指定の助動詞**といふ。

○關西地方では多く「だ」を「ぢや」と云ふ。近畿地方では之を「や」と云ひ、「です」を「どす」又は「だす」と云ふ。

○用言又はそれを伴ふ句・節は其の連體形に「の」が附いて體言に準じて用ゐられる。「の」は「だ」「です」が附くときには「白帆が走るんだ」「それはお前が惡いんだ」のやうに「ん」になることがある。

○「本をお讀みだ」「舟にお乘りです」のやうに、「だ」「です」は、動詞の連用形に「お」を冠らせたものにも附く。動詞の連用形に「お」を冠らせたものを名詞として用ゐたのである。

指定の助動詞の活用は第二種の形容動詞の活用と全く同じである。

推量形	連用形	中止形	終止形
だら(う)	だつ(た)	で	だ
でせ(う)	でし(て)(た)	です	です

名詞又は名詞に準じて用ゐられた語句に、「で、ある」「で、あり、ます」「で、ございます(で、ます)」を附けても事柄を解說するに用ゐる。「で、ある」「で、あり、ます」は對話には用ゐられぬ。

○「あれも行くだらう」「其の山は高いでせう」のやうに、用言の終止形に附く「だらう」「でせう」は指定の助動詞の推量形に「う」の附いたものが轉じて、推量の助動詞になつたのである。

第六節　推量の助動詞

推量の助動詞　動作・有様を推量するには次の様な種々の方法がある。

一、一般の推量を表すには、

イ、四段活用の動詞の否定形・形容動詞の推量形に「う」、他の活用の動詞の否定形に「よう」を附ける。例へば、

文典は本箱にあらう。

此の川は淺からう。

花が咲いたら、綺麗だらう。

此の藪には蛇が居よう。

二階に上れば海が見えよう。

多分明日は來よう。

おほかた出席しよう。

○「う」「よう」は文語の「む」の轉である。未來の助動詞としても用ゐる。

ロ、「もう歸るだらう(でせう)」「此の濠は深いだらう(でせう)」のやうに、動詞・形容詞の終止形に「だらう」「でせう」を附ける。

○關西地方では多くは「だらう」を「ぢやらう」といひ、近畿地方では「やらう」といふ。

二、容子を推量するには、「生徒が學校から歸るらしい」「あの人ではないらしい」のやうに、動詞・形容詞の終止形に「らしい」を附け、「向ふから來るやうだ(=です)」「すこしむづかしいやうだ(=です)」のやうに、同じ形に「やうだ(=です)」を附ける。

○「らしい」は文語の「らし」の轉じたのである。接尾語にも「らしい」がある。

三、形勢を推量するには「雨が降りさうだ(=です)」「どうやら負けさうだ(=です)」のやうに、動詞の連用形に「さうだ(=です)」を附ける。

「大阪にはペストがはやるさうだ(=です)」「夜は人通が少いさうだ(=です)」のやうに、「さうだ(=です)」は又動詞・形容詞の終止形に附いて、風評を表す。

以上の「う」「よう」「だらう」「でせう」「らしい」「やうだ(=です)」「さうだ(=です)」を**推量の助動詞**といふ。

推量の助動詞の中で「う」「よう」「だらう」「でせう」は活用せぬ。「らしい」は「見たらしく

話す」「姉は縫物をするらしく、弟は本を讀むらしい」「行くらしい者もない」のやうに、「らしく」「らしい」と活用する。「らしく」は副詞形・中止形、「らしい」は終止形・連體形である。

副詞形の「らしく」は形容詞の場合と同じく、音便で「らしう」となることがある。「らしく」は「あつた」と約まつて「らしかつた」となり、推量の過去を表す。「やうだ(=です)」「さうだ(=です)」は第二種・第三種の形容動詞のやうに活用する。

第七節　譬喩の助動詞

語幹	推量形	連用形	中止形	副詞形	終止形	連體形	假定形
さう(=) やう(=)	だら(う) でせ(う)	だつ(た) でし(て)(た)	(=)で (=)で	○ ○	(=)だ (=)です	○ ○	○ ○
さう(=) やう(=)	○	○	○	(=)に (=)に	○	(=)な	(=)なら

譬喩の助動詞　「顔は猿のやうだ(=です)」「年月は流れるやうだ(=です)」「花瓣(ハナビラ)の散るのは丁度蝶が舞ふやうだ(=です)」のやうに、體言に「の」を介して、又は體言に準じて用ゐられた語句に「やうだ(=です)」の附いたものは、物事(主語)を之に類似した物事と比べるに用ゐる。「やうだ(=です)」を**譬喩の助動詞**と云ふ。

「やうだ(=です)」は第二種・第三種の形容動詞のやうに活用する。

第八節　希望の助動詞

希望の助動詞　「早く歸りたい」「もつと居たい」のやうに、動詞の連用形に「たい」の附いたものは物事を希望するに用ゐる。「たい」を**希望の助動詞**といふ。

○「たい」は文語の「たし」の轉じたのである。

希望の助動詞の活用は全く形容詞と同じである。

中止形	終止形	假定形
副詞形	連體形	
たく	たい	たけれ(ば)

○動詞に希望の助動詞の附いたものは「歸りたさうに」のやうに「たい」の語幹「た」に接尾語の「さうに」が附いて、副詞になり、「見たがる」のやうに、之に接尾語の「がる」が附いて動詞になる。

希望の助動詞の副詞形「たく」は、形容詞の場合と同じく、下に「ございます」が來るときには音便で「たう」となる。

「たく」に「ある」の附いて約まつたものは、形容詞の場合と同じく「行きたかりさうだ」「行きたからう」のやうに、「たかり」(連用形)「たから(う)」(推量形)の二つの形に活用する。

第九節　否定の助動詞

肯定・否定　「雨が降る」「海が見える」の「降る」「見える」のやうに、動作を正面から說くのを**肯定**と云ひ、「雨は降らぬ(ん)」「遠い所は見えない」の「降らぬ(ん)」「見えない」のやうに、動作・有樣を裏面から說いて打消すのを**否定**と云ふ。形容詞の「ない」は其の儘で否定を表す。

否定の助動詞　動作を否定するには、次の二つの方法がある。

一、動作を其の儘に否定するには、前の例のやうに、動詞の否定形に「ぬ(ん)」又は「ない」を附ける。尤も、サ行變格活用動詞の否定形の「せ」には「ぬ(ん)」が附いて、「ない」は附かず、「し」には「ない」が附いて、「ぬ(ん)」は附かぬ。

○四段活用の動詞の「ある」には「ぬ(ん)」も「ない」も附かぬ。又敬讓動詞の「ござる」には「ぬ(ん)」が附いて、「ない」は附かぬ。

○「ぬ(ん)」は多く關西地方に用ゐ、關東地方では、多く「ない」を用ゐる。

二、動作を推量して否定するには、四段活用の動詞の終止形、其の他の活用の動詞の否定形(サ變では「し」)に「まい」を附ける。例へば、

(四)　讀む
(上一)起き
(下一)教へ　まい
(カ變)來(コ)
(サ變)し

○「まい」は文語の「まじ」の轉じたのである。

○「來(コ)まい」を「くまい」「くるまい」などといひ、「しまい」を「せまい」「すまい」「するまい」などといふ所

がある。

「ぬ(ん)」「ない」「まい」を**否定の助動詞**(打消の助動詞)といふ。

否定の助動詞の「まい」は活用せぬ。

「ぬ(ん)」は「雨が絶えず降る」「雨も降らず、風も吹かぬ(ん)」「降らぬ(ん)間に行かう」「雨が降らねば百姓が困る」のやうに、「ず」「ぬ」「ね」に活用する。「ず」は副詞形・中止形、「ぬ(ん)」は終止形・連體形、「ね」は假定形である。

副詞			
中止形	終連形	終止體形	假定形
ず		ぬ(ん)	ね(ば)

○文語では「ず」を終止形にも用ゐる。

○副詞形の「ず」は「默つて居らず」に話せ」「物をも言はず」に聞いて居る」のやうに、接尾語の「に」の附くことが多い。

○「ず」は又「土附かず」「鼠入らず」「義理知らず」のやうに、名詞形となることがある。

「ぬ」の過去を「なんだ」といふ。これは「おほかた歸らなんだらう」「歸らなんだら心配しよう」「とう〳〵歸らなんだ」「歸らなんだ人もある」のやうに、「なんだら」「なんだ」と活用する。「なんだら」は推量形・假定形、「なんだ」は終止形・連體形である。

「ない」は「運動もできなくなる」「運動もできない」「運動の出來ない者はだめだ」「運動ができなければ困るだらう」のやうに、「なく」「ない」「なけれ」と活用する。「なく」は副詞形、「ない」は終止形・連體形、「なけれ」は假定形である。

副詞形			
	終連形	終止體形	假定形
なく		ない	なけれ(ば)

副詞形に「て」が附くときには「出來なくつて」「しなくつて」のやうに促音を伴ふことが多い。

○副詞形の「なく」は「要らなくなる」「見えなくする」のやうに、多くは「なる」「する」が續く。

「ない」の副詞形の「なく」が「ある」と約まつたものは、形容詞の場合と同じく、「居なかりさうだ」「居なからう」のやうに、「なかり」(連用形)「なから(う)」(推量形)の二つの形に活用する。

「ない」の過去を「なかつた」と云ふ。連用形の「なかり」に「た」の附いたものゝ音便である。

形容詞を否定するには「人口は多くない」「あの山は高くない」のやうに、副詞形に「ない」を附け、第二種の形容動詞を否定するには「浪が靜でない」「雲行も穩でない」のやうに、中止形に「ない」を附ける。此の「ない」は形容詞であるけれども、このやうに助動詞のやうな作用をすることもあるのである。

第十節　時の助動詞

現在時　「手紙を書く」「函に入れる」の「書く」「入れる」のやうに、動作の現に行はれるのを**現在時**といふ。

現在時は次の場合には時に關係なく用ゐられる。

一、「地球は太陽の周圍を廻る」の「廻る」のやうに、動作の絶間なく行はれる場合。

二、「私は毎朝六時に起きる」の「起きる」のやうに、平生の習慣を云ふ場合。

三、「一に二を足せば、三になる」「藝は身を助ける」の「なる」「助ける」などのやうに、定論又は格言を云ふ場合。

現在時は「明日は必ず出發する」の「出發する」のやうに、動作の起ることの確な場合には、未來時の代に之を用ゐ、次の例のやうに、過去に起つた動作を目の前に見るやうに云ひ表す場合には、過去時の代に之を用ゐる。後の場合を**歴史的現在**といふ。

船の底に穴を明けたと見えて、水がはいつて來たから、侍は騷ぐ、女は泣き出す、船頭は鎭める、仲々の騷ぎ。こつちは町奴の連中が手を叩いて喜びました。

過去時　「手紙を書いた」「函に入れた」の「書いた」「入れた」のやうに、動作の嘗て起つたのを**過去時**といふ。

過去時の助動詞　過去時の動詞を作るには、前の例のやうに、動詞の連用形に「た」を附ける。「た」を**過去時の助動詞**といふ。

○「た」は文語の「たり」の轉じたのである。

「た」がガ行・ナ行・バ行・マ行四段活用の動詞に附くときには「急いだ」「死んだ」「飛んだ」「讀んだ」のやうに「だ」になる。

「た」は「もう手紙を書いたらう」「手紙を書いたら讀んで見ろ」「折角書いたら間違つ

て居た」「手紙を書いた」「書いた手紙を裂いてしまつた」のやうに、「たら」「た」と活用する。「たら」は推量形・假定形・既定形、「た」は終止形・連體形である。既定形とは或條件の成り立つたことを許していふ形である。

推量形	終止形・連體形	假定形	既定形
たら(う)	た	たら	

○假定形・既定形の「たら」には、助詞の「ば」を附けて用ゐることもある。既定形は「たれ」といふことがある。其の場合には必ず「ば」を附ける。

○過去の動作を想ひ起すときに、「書いたつけ」「行つたつけ」のやうに「たつけ」を用ゐることがある。

○文語の「たり」は「行つたり戻つたり」「見たり聞いたり」のやうに對偶の動詞の下に附いて動作の交互に起ることを表す場合に限つて、口語にも用ゐられる。

未來時　「明日は上野へ行かう」「おつつけ夜も明けよう」のやうに、動作の今より後に行はれるのを**未來時**といふ。

未來時の助動詞　未來時の動詞を作るには、四段活用の動詞の否定形に「う」、他の活用の否定形（サ變では「し」）に「よう」を附ける。例へば、

（四）行かう

（上一）起きよう
（下一）明けよう
（カ變）來よう
（サ變）しよう

「う」「よう」を**未來時の助動詞**といふ。

○未來時の助動詞の「う」「よう」を東北地方では「書くべい」「書くべい」「受けべい」「受けべい」のやうに「べい」又は「べい」などと云ひ、山梨・靜岡・愛知等には「書かず」「書かあず」「書かあ」「受けず」「受けいず」「受けい」などと云ふ所がある。「べい」「べい」は文語の「べし」の轉じたもので「ず」は文語の「むとす」の約まつたものである。

○「起きよう」「受けよう」「しよう」などのやうな、上一段活用・下一段活用・サ行變格活用の動詞の未來を關西地方では「起きよう」「起きう」「受けう」「受きう」「せう」「しう」などと云ふ所が多い。「起きう」「受けう」「せう」は文語の「起きむ」「受けむ」「せむ」の轉じたのである。又加行變格活用の未

來を「きよう」「こう」「くう」などと云ふ所がある。「こう」は西國に多い。文語の「こむ」の轉じたのである。

未來時の助動詞は活用せぬ。

現在時・過去時又は未來時を勢强くといふには、「書いてしまふ」「取つてしまつた」「死んでしまはう」のやうに、「て、しまふ」(現在)「て、しまつた」(過去)又は「て、しまはう」(未來)を附ける。

進行時　一、「鶯が面白く鳴いてゐる」の「鳴いてゐる」は「鳴く」といふ動作が現に進行してゐることを云ひ、

二、「今朝竹藪の傍を通つたときに、鶯が面白く鳴いてゐた」の「鳴いてゐた」は「鳴く」といふ動作の嘗て進行してゐたことを云ひ、

三、「明日竹藪の傍を通れば、鶯が面白く鳴いてゐよう」の「鳴いてゐよう」は「鳴く」といふ動作の、今より後に進行してゐるべきことをいふ。

一のやうに動作の、現に進行してゐるのを**進行的現在時**と云ひ、二のやうに、動作の嘗て進行してゐたのを**進行的過去時**と云ひ、三のやうに、動作の今より後に進行してゐるべきのを**進行的未來時**と云ひ、一・二・三を總稱して**進行時**と云ふ。

進行的現在時の動詞を作るには、動詞の連用形に「て、ゐる」「て、をる」「て、いらつしやる」「て、おいで、なさる」「て、に、なる」を含む。以下之に倣へ。を附け、進行的過去時の動詞を作るには、同じ形に「て、ゐ、た」「て、をつた」「て、いらつしやつた」「て、おいで、なさつた」「て、に、なつた」を含む。以下之に倣へ。を附け、進行的未來時の動詞を作るには、同じ形に「て、ゐ、よう」「て、をら、う」「て、いらつしやら、う」「て、おいで、あそばさ、う」「て、おいで、なさら、う」を含む。以下之に倣へ。を附ける。

○「て、ゐる」「て、をる」「て、いらつしやる」などは「ある」「ゐる」「をる」には附かぬ。又敬讓動詞の「いらつしやる」「ござる」にも附かぬ。次の存在時の動詞を作るものも之に同じ。

○關東地方には「鳴いてゐる」「飛んでゐる」を約めて「鳴いてる」「飛んでる」と云ひ、關西地方には「鳴いてをる」「飛んでをる」を約めて「鳴いとる」「飛うどる」又は「鳴いちよる」「飛うぢよる」といふ。(過去・未來もこれに準ずる)　又「鳴きをる」「飛びをる」を轉じて「鳴きよる」「飛びよる」といふ所もある。(過去・未來もこれに準ずる)

存在時　一、「松の木が植ゑてある」「花が咲いてゐる」の「植ゑてある」「咲いてゐる」は植ゑた結果、咲いた結果が現に存在してゐることを云ひ、

二、「あそこには、松の木が植ゑてあつた」「たつた昨日まで花が咲いてゐた」の「植ゑてあつた」「咲いてゐた」は、植ゑた結果、咲いた結果が嘗て存在してゐたことを云ひ、

三、「明後日頃には、あすこに、松の木が植ゑてあらう」「次の日曜日には花が咲いてゐよう」の「植ゑてあらう」「咲いてゐよう」は、今より後に植ゑ又は咲く結果の存在してゐるべきことを云ふ。

一のやうに、過去の動作の結果が現に存在してゐるのを**存在的現在時**と云ひ、二のやうに、過去の動作の結果が嘗て存在してゐたのを**存在的過去時**と云ひ、三のやうに、今より後に起る動作の結果が存在してゐるべきのを**存在的未來時**と云ひ、一・二・三を總稱して**存在時**と云ふ。

存在的現在時の動詞を作るには、動詞の連用形に「て、ある」「て、ゐる」「て、をる」を附け、存在的過去時の動詞を作るには、同じ形に「て、あつた」「て、ゐた」「て、をつた」を附け、存在的未來時の動詞を作るには、同じ形に「て、あら、う」「て、ゐ、よう」「て、をら、う」を附ける。

○「ある」「ゐる」「をる」は獨立に用ゐられるときには、有情非情に依つて別れるけれども、助動詞に準じて用ゐられるときには、このやうに非情にも「ゐる」「をる」を用ゐる。「て、ある」は、松が植ゑてある」「掛物が掛けてある」のやうに、他動詞の客語が主語になつた場合に之を用ゐるのである。

○存在的現在時は「花鳥の繪をかいた掛物」「馬に乘つた人」のやうに、過去時の形を用ゐることがある。

「て、ゐる」「て、をる」(過去・未來も之に準ずる)の附いた存在時は進行時と紛れ易い。前後の意味で推知しなければならぬ。

イ、あの、中村君と話して(ゐる)人は誰か。(進行的現在時)
あの、洋服を着て(をる)人は今井君だ。(存在的現在時)

ロ、ゆふべの會に、中村君と話して(をつた)人は誰か。(進行的過去時)
ゆふべの會に、一人、洋服を着て(をつた)人は誰か。(存在的過去時)

ハ、明日の今頃は歸省して父や母と話して(をらう)(進行的未來時)
四月には大學の制服を着て(をらう)(存在的未來時)

第十一節　助動詞と助動詞との連續

「家に歸つた」「水を飲ませる」のやうに、動詞に一つの助動詞が附いただけでは、十分に其の叙述を助けることの出來ぬ場合がある。それで、「家に歸つたらう」のやうに、過去時の助動詞の「た」に、推量の助動詞の「う」が附いて、過去の推量を表し、「水を飲ませない」のやうに、令動の助動詞の「せる」に否定の助動詞の「ない」が附いて、令動の否定を表すなど、助動詞は他の助動詞に連つて動詞に複雜な叙述をさせる。

助動詞に他の助動詞が連なるのは、其の助動詞が動詞に連なる規定と略同じである。併し動詞の或活用形には附いても、助動詞の同じ活用形には附かぬものもあり、或ものには附いても、他のものには附かぬのもある。次の表を見よ。

助動詞＼活用形	否定形	推量形	連用形	終止連體形
				なさる あそばす （に、なる）
	れ られ	れ られ	れ られ	れる られる
	ぬ（ん） （なんだ） ない （なからう、なかつた） まい よう	くださる （て、くださる） まうす ます さうだ（＝です） たい た （て、ゐる）（て、いらつしやる） （て、をる）（て、いらつしやる） （て、ある）（て、ござる）	なさる あそばす （に、なる） ます さうだ（＝です） たい た	のだ のです （ので、ある（ので、ござる）） だらう でせう らしい やうだ（＝です） さうだ（＝です）

令	
動	
せ させ	られる ぬ(ん) (なんだ) ない (なからう、なかつた) まい よう
れ られ	ぬ(ん) (なんだ) ない (なからう、なかつた)
れ られ	なさる あそばす (に、なる) くださる (て、くださる) ます さうだ(=です) たい た (て、ゐる(て、いらつしやる) て、をる(て、いらつしやる) て、ある(て、どざる))
せ させ	ます さうだ(=です) たい た
せる させる	のだ のです (のて、ある(のて、どざる)) だらう でせう らしい やうだ(=です) さうだ(=です)
れる られる	のだ のです (のて、ある(のて、どざる)) だらう でせう

	まい よう
	ぬ(ん) (なんだ) ない (なからう、なかつた) れる* ぬ(ん) (なんだ) ない (なからう、なかつた) う
	なさり(=い) (に、なり) くださり(=い) (て、くださり(=い)) ます さうだ(=です)
	なさつ (に、なつ) くださつ (て、くださつ) た (て、いらつしやる)
	ます さうです たい た (て、いらつしやる)
	ます さうだ(=です) たい
	なさる (になる) くださる (て、くださる) あそばす
	のだ のです (のて、ある(のて、どざる)) だらう でせう らしい やうだ(=です) さうだ(=です) まい
	らしい やうだ(=です) さうだ(=です)

敬讓	まうさ いたさ つかまつら せる ぬ(ん) (なんだ) ない (なからう、なかつた) う ませ ぬ う
	まうし いたし た (て、るる(て、いら て、しやる)(て、いら て、をる)(て、いら て、しやる)(て、ござる) ます つかまつり さうだ(=です) たい た つかまつつ (て、るる(て、いら て、しやる)(て、いら て、をる)(て、いら て、しやる)(て、ある)(て、ござる) まし、た だつ
	まうす いたす つかまつる のだ のです (ので、ある(ので、ござる)) だらう てせう らしい やうだ(=です) さうだ(=です) まい のです (ので、ござる) のでせう やうです さうです まい ます

指定	だら でせ う (て、あら(て、ござら))
	でし た (て、あつ) (ます) (て、あり) (さうだ(=です)) (たい) (て、ござり(=い)、ます)
	だ です (て、ある) (らしい) (やうだ(=です)) (さうだ(=です)) (まい)
推量	(らしから、う) やうだら(=でせ) さうだら(=でせ) う
	(らしかつ、た) やうだつ さうだつ た
	う よう だらう でせう らしい やうだ(=です) さうだ(=です)
譬喩	やうだら(=でせ)、う
	やうだつ(=でし)、た
	やうだ(=です)
	のだ のです

	希望	否定	
	(たから、う)	(なんだら、う) (なから、う)	
	(たかり、さうだ) (たかつ、た)	(なかつ、た)	
	たい だらう(のて、ある(のて、どざる)) でせう らしい やうだ(=です) さうだ(=です)	ない ぬ のだ のです(のて、ある(のて、どざる)) だらう でせう らしい やうだ(=です) さうだ(=です)	(なんだ) まい
			のだ のです

時			
過去	未來		
たら、う		(られる) (させる) (ぬ(ん)) (なんだ) (て、ゐ)(ない)(なからう、なかつた) (まい) (よう) (れる)	
		(なさる) (て、くださる) (ます) (て、ゐ)(さうだ(=です)) (たい) (た)	
た (のて、ある(のて、どざる)) だらう でせう らしい やうだ(=です) さうだ(=です)	う よう	(て、ゐる(ていらつしやる)) (のだ) (のです) (のて、ある(のて、どざる)) (だらう) (でせう) (らしい) (やうだ(=です)) (さうだ(=です)) (のだ) (のです)	

進行存在	(て、をら) (ない) (なからう、なかつた) (う)	(て、をり) (たい)	(ます) (さうだ(=です)) (て、をつた)
	(て、いらつしやら) (ない) (なからう、なかつた) (う)	(て、いらつしやり(=い))	(ます) (さうだ(=です)) (て、いらつしやつた)
	(れる△) (ぬ(ん))	(て、をる(て、いらつしやる))	(ので、ある(のでござる)) (だらう) (てせう) (らしい) (やうだ(=です)) (さうだ(=です)) (まい)
存在	(て、あら、う)	(て、あり)	(ます) (さうだ(=です)) (たい) (て、あつた)
			(のだ) (のです) (ので、ある(のでござる)) (だらう) (てせう) (らしい) (やうだ(=です))
			(て、ある)
			(さうだ(=です)) (まい)

○＊は敬讓の助動詞、△は勢動の助動詞、(　)に入れたものは助動詞に準ずべきもの。

○「ぬ(ん)」に「です」は附かぬけれども、「まぬりませぬ(ん)でした」のやうに、「です」に「た」を附けた「でした」は「ます」に「ぬ(ん)」を附けた「ませぬ(ん)」には附く。

第十章　助詞

助詞　體言に附いて他の語との關係を示し、種々の語辭に附いて、種々の意趣を表し、文の終に附いて其の體を變じ、用言に附いて、語句と語句とを接續する辭を助詞と云ふ。

第一節　第一類の助詞

おもに體言に附いて他の語との關係を示すものを第一類の助詞とする。次の十二の辭はこれに屬する。

が　「が」は「雪が降る」「手が冷い」のやうに、多くは主語を示すに用ゐる。

○「髪は黑いがよい」「本を讀むのが一番樂しい」「色の白いのが自慢ださうです」「これからが面白い」などは上の語句を體言に準じたのである。

○第四類にも「が」がある。

の　「の」は多くは次の四つの場合に用ゐる。

一、「海の水」「猫の爪」「義經の家來」「机の脚」のやうに、體言に附いて下の體言を所有する意を示し、之を限定するとき。

二、次の例のやうに、體言に附いて、下の體言を限定するとき。

近江の琵琶湖。　君が代の唱歌。　博識の人。
姉の寫眞。　琴の稽古。　習志野の演習。
栗毛の馬。　木綿の羽織。　弓の名人。
夢の世。

右の一と二との場合には、下に來る名詞を略して、「あなたの本も私の(本)も」「木綿の羽織も紬の(羽織)も」などのやうにいふことがある。これは前後の意味で、たやすく推量される場合に限る。

○「どこかの人」「買つたばかりの品」「親しい友だちからの手紙」などは上の語句を體言に準じたのである。

三、「人の落した金」「汽車の通る時」「色の白い女」のやうに、主語を示すとき。但し、句節の場合に限る。

四、「燕の飛ぶの‖(速度)は早い」「疑はれるの‖(事)がつらい」「一番よいの‖(品)を取る」のやうに、用言・助動詞の連體形について、或名詞に代るとき。

「新しく建てた家に移る」「古い切手を集める」のやうな文では、下の體言「家」「切手」を上に置き、之を限定する用言「建てた」「古い」を下に置いて、「家の‖新しく建てたの‖に移る」「切手の‖古いの‖を集める」のやうにいふことがある。此の場合の用言の下に附けた「の」は體言(「家」「切手」)と同じ物事を表す。

○以上四つの場合の外に、「何の‖かの‖と」「善いの‖悪いの‖と」「要るの‖要らぬの‖と」のやうに、語を接續するに用ゐることがある。此の「の」は「とか」と同じやうな意を表す。

に　「に」は多くは次の八つの場合に用ゐる。

一、「病氣に‖罹る」「豆を鳩に‖やる」のやうに、動詞の補語を示すとき。

二、「蚊に‖さゝれる」「書生に‖送らせる」のやうに、所動又は令動の補語を示すとき。

三、「鳥に‖も劣る」「昨日に‖増して暑い」のやうに、比較の標準を示すとき。

四、「机に‖本を置く」「朝五時に‖起きる」のやうに、動作の落ち着く所、又は起る時を示すとき。

五、「年賀に‖行く」「月見に‖行く」のやうに、動作の目當を示すとき。

○「賊を征伐に‖行く」「虫を取りに‖來る」などは、上の語句を體言に準じたのである。

六、「御位にお即きになる」「今晩おたちになる」のやうに、動詞の連用形に「お」を冠らせたものに附き、「なる」に續けて、動作を敬つて云ふとき。

七、「行くに‖行かれぬ」「言ふに‖言はれぬ」のやうに、連體形の動詞に附き、否定の、勢動の動詞に續けて、或動作をしようとしても、思ふにまゝにならぬ意を表すとき。

八、「ビールに‖正宗」「日々新聞に‖國民新聞」のやうに、物事を並列し、「月に‖むら雲、花に‖風」「牡丹に‖唐獅子、竹に‖虎」のやうに、物事を配合するとき。

○第四類にも、接尾語にも「に」がある。

を　「を」は次の二つの場合に用ゐる。

一、「羽根を‖つく」「凧を‖揚げる」のやうに、他動詞の客語を示すとき。

二、「鳥が空を‖飛ぶ」「筑後川を‖下る」のやうに、自動詞の動作の行はれる場所を示すとき。

○「を」には「舟を‖あがる」「地を‖離れる」のやうに、「から」の意を示すものもあるが、尚これも二の場合

と同じく「あがる」「離れる」といふ自動の動作の行はれる場所「舟」「地」を示して居ると云ふことが出來る。

と　「と」は多くは次の四つの場合に用ゐる。

一「江戸を東京と改める」「それときめる」のやうに、物事を受け止めるとき。

○「行くときめろ」「まだ來ぬと見える」「どれがよいかと訊く」などは上の語句を體言に準じたのである。

○「東京地方では「と」が「いふ」といふ動詞に續くときに之を約めて、次の樣な、いろいろな言ひ方をすることがある。

東京といふ所――東京てい所
人といふもの――人つてもの
大阪といふやうな所――大阪てな所
鳥といへば――鳥つてや
知らないといへば――知らないつてば
行けといつたら――行けつたら
書かないといつて――書かないつて

見ろといつたとて――見ろたつて
さあ取掛れといふので――さあ取掛れてんで

二「あれとは違ふ」「これと同じ」のやうに、比較の標準を示すとき。

三「友達と遊ぶ」「君と淺田君を訪ねよう」のやうに、共同の動作をするものを示すとき。

四「京都と大阪」「青と黄と赤と白と黒を五色といふ」「取ると遣ふとは大きな相違だ」「讀むのと書くのとどつちが易い」のやうに、物事を並列するとき。

○文語では「青と黄と赤と白と黒とを」のやうに、並列する名詞ごとに「と」を附けなければならぬのであるが、口語では末の語の下に之を省くことが多い。併し「水曜日と土曜日の午後を面會日ときめる」といふ文は「水曜日と土曜日の午後とを」の意か「水曜日と土曜日との午後を」の意か分らず、「甲と乙の父を招く」といふ文は「甲と乙との父を」の意か、「甲と乙の父と」の意か分らぬ。かういふやうに、誤解を起す虞のある場合には、必ず「と」を附けなければならぬ。

○第四類にも、接尾語にも「と」がある。

へ　「へ」は「前へ進む」「東京へ行く」「棚へ上げる」「箱へ入れる」のやうに、動作の方向を

示し、又は其の落ち着く所を示すに用ゐる。

○「へ」は文語では專ら動詞の方向を示すに用ゐるが、口語ではかくの如く動作の落ち着く所を示すにも用ゐる。

から　「から」は「田舍から來た」「ポケットからハンケチを出す」のやうに、動作の起る物事を示すに用ゐる。

○「あの家ばかりから出ます」「皆が集つてから始めよう」などは、上の語句を體言に準じたのである。

○第四類にも「から」がある。

まで　「まで」は「町外れまで送る」「こゝまで來い」「十時まで勉强する」のやうに、動作の終局する物事を示すに用ゐる。

○「歸るまで待て」「蕎麥屋にはいつたまで知つて居る」「十錢の金がないまで貧乏して居る」「乞食にまでなつた」などは上の語句を體言に準じたのである。

「五時から十時まで續く」「青森から下の關までずつと汽車で行ける」のやうに、前條の「から」と「まで」とは屢〻相對して用ゐられる。

より　「より」は「君より後れる」「山より高い」「これより綺麗だ」のやうに、比較の標準を示すに用ゐる。

○「貰ふより買ふ方がよい」「思つたよりむづかしい」「花が咲いたのより美しい」などは上の語句を體言に準じたのである。

○「より」は多くは本文の例のやうに、體言に附いて用言に續けるのであるが、間〻「これより外にはない」「箱根より東にある」のやうに、體言に續けて、之を限定することがある。

「海よりか深い」「これよりか大きい」のやうに、「より」の下に「か」を添へていふことがある。「より、か」は約めて「よか」ともいふ。

○「より」は文語では前の「から」と同じ場合にも用ゐる。

で　「で」は「筆で字を書く」「東京で買つた」「一週間で出來上つた」「親のお蔭で樂に暮せる」のやうに、體言に附いて、下の用言を限定するに用ゐる。

○「で」は「にて」の約つたのである。

○指定の助動詞の活用にも「で」がある。又「本を讀んで」「自ら働かないで」の「で」は第四類の「て」の轉である。

や　「や」は「筆や紙を賣る家」「梅や櫻や桃が一時に咲く」のやうに、物事を並列するに用ゐる。併し「や」は「と」とは違ひ、物事の他にもある意を表す。又一番終の體言の下にはいつも之を附けぬ例である。

○第四類にも「や」がある。

だの　「だの」は「動物園には獅子だの虎だの象だの、いろ〳〵珍らしい毛物が居る」「大工だの左官だのを呼んで修繕させる」のやうに「や」と同じ場合に用ゐる。併し「だの」は、いつも語ごとに附ける例である。

○「いやだのおうだのといつて」などの「だの」は指定の助動詞の「だ」に「の」が附いたのである。

第二節　第二類の助詞

種々の語辭に附いて、種々の意趣を表すものを、第二類の助詞とする。次の十七の辭は之に屬する。

は　「は」は次の三つの場合に用ゐる。

一、「天は高い」「詳しくは知らない」「たまには來る」「こゝまでは來まい」のやうに、多くの物事の中から或物事を標出するとき。

○「は」は物事を標出するに用ゐる辭であるから、「天は高く、地は廣い」「西は富士、東は筑波」「山へは一里、海へは半里」の樣に、彼と此とを對照して用ゐることが多い。

「は」が「を」の下に附くときには、「茶をば飲んで酒をば飲まぬ」のやうに「ば」になる。併し多くの場合には、「茶は飲んで、酒は飲まぬ」のやうに「を」を省く。

二、「雨が降りはせぬ」「打たれはしたが、傷はつかなかつた」のやうに、或動作を標出するとき。此の場合には動詞・助動詞の連用形に附いて「する」と云ふ動詞に續ける。

三、「讀みは讀んだが分らなかつた」「立たせは立たせたが、案じられる」のやうに、動作を強めて云ふとき。此の場合には動詞・助動詞の連用形に附いて同じ動詞を重用し、第四類の助詞を介して反對の結果を云ふ。

○「讀むことは讀むが分るまい」「逢ふことは逢つたがすぐ別れた」のやうに、動詞の連體形に續けた「こと」といふ名詞に「は」を附けて同じ動詞を重用し、「飲むには飲むが、澤山には飲まぬ」「あるにはあるが少ない」のやうに、動詞の連體形に「に、は」を附け、同じ動詞を重用して、三と同じ場合

に用ゐることがある。

○第三類にも「は」がある。

も　「も」は次の四つの場合に用ゐる。

一、「年寄も子供も出る」「善くも惡くもない」「東からも西からも來る」のやうに、物事を並列するとき。

○「私も行く」「こゝからも見える」などは「私も(外の人も)行く」「こゝからも(あすこからも)見える」のやうに、他の語辭を省いていつたのである。

「も」が「を」の下に來るときには「酒(を)も飲み、菓子(を)も食べる」のやうに、多くは「を」を省く。

二、「見もし、聞きもした」「打たれもし、蹴られもした」のやうに、動作を並列するとき。

此の場合には動詞・助動詞の連用形に附いて「する」と云ふ動詞に續ける。

三、「百圓もかゝつた」「さほど遠くもない」「行くかも知れぬ」のやうに、意味を深くするとき。

四、「飲みも飲んだ」「聞かせも聞かせた」「高いも高い」のやうに、動作有樣を強めて云ふとき。此の場合には動詞・助動詞の連用形、形容詞の連體形に附き、同じ用言を重用する。

○第四類にも「も」がある。

でも　「でも」は次の二つの場合に用ゐる。

一、「此のくらゐな石は子供でも上げる」「安くでもあれば買はう」「少しでもあればよいが」「こゝからでも見える」のやうに、多くの物事の中から或物事を擧げて、他を類推させるとき。

○「でも」は「水でも湯でも少し下さい」「食はないでも飲まないでも差支ない」のやうに、彼と此と對照して云ふことがある。

○「筆でも書ける」「舟でも行ける」の「でも」は「で」に「も」の附いたのである。それで「も」を去つて「筆で書ける」「舟で行ける」といつても意味は通じるが、こゝの「でも」は「も」を去つては多くは意味が通ぜぬ。

二、「死にでもする」「打たれでもしたら懲りよう」のやうに、或動作を擧げて、他を類推させるとき。此の場合には動詞・助動詞の連用形に附いて「する」と云ふ動詞に

續ける。

さへ　「さへ」は次の三つの場合に用ゐる。

一、「水さへ喉に通らぬ」「靜にさへしていらつしやれば癒ります」「聞いてさへぞつとする」のやうに、或物事を擧げて他を類推させるとき。

二、「漬物さへあれば何も要らぬ」「直にさへ行けば間に合ふ」「君にさへ分つたらよい」のやうに、或物事に重きを置いて、他を顧みぬ意を示すとき。

三、「暑さが凌げさへすればよい」「思ひ切らせさへすれば安心だ」のやうに、或動作に重きを置いて、他を顧みない意を示すとき。此の場合には動詞・助動詞の連用形に附いて「する」といふ動詞の假定形に續ける。

○「さへ」は文語では「雨降るに風さへ吹く」「鷗さへ浪と見ゆ」のやうに、或物事に他の物事の加はる意味を示す。

「禽獸でさへ恩を知つてゐる」「大きな石でさへ流れてしまつて」のやうに、「でさへ」と云ふ助詞も「さへ」と同じ意を示すに用ゐる。

○「ペンでさへ字は書ける」の「でさへ」は「で」に「さへ」の附いたのである。本文のと混じてはならぬ。

こそ　「こそ」は次の二つの場合に用ゐる。

一、「私こそ御無沙汰いたしてをります」「ようこそお出でになりました」「それでこそわが子だ」「君の爲を思へばこそ忠告するのだ」のやうに、「は」よりも一層強く物事を標出するとき。

二、「捨てこそせぬが不用だ」「使はれこそするが、心服してはゐない」のやうに、「は」よりも一層強く動作を標出するとき。此の場合には、動詞・助動詞の連用形に附いて「する」と云ふ動詞に續け、第四類の助詞を介して反對の結果を云ふ。

○文語では「こそ」が文の中にあるときには、其の末の用言を既然形で結ぶ規則であるが、口語では結びには關係せぬ。尤も或地方では、場合に依つては、今も文語の規則を存してゐるところがある。

ばかり　「ばかり」は次の二つの場合に用ゐる。

一、「今年は雨ばかり降る」「勉强するばかりではわるい」「綺麗なばかりで品は惡い」「賬にばかりなる」「家にばかり居る」のやうに、物事の他にはない意を示すとき。

○文語には「ばかり」と同じ意を示す「のみ」といふ助辭があるが、口語には失せてゐる。

二、「千圓ばかりかゝる」「三つばかり在る」のやうに分量・程度を示すとき。

○「ばかり」は「ばつかし」「ばかし」「ばつかり」「ばつか」のやうに轉じて用ゐる。

だけ　「だけ」は次の四つの場合に用ゐる。

一、「これだけ殘つた」「見るだけで止めておく」「讀んだだけ書く」「君にだけ話す」のやうに、物事の他にはない意を示すとき。

二、「百人だけ入學を許す」「食ふだけ稼ぐ」「取られるだけ取る」「多いだけ都合がよい」のやうに、分量を示すとき。

三、「法律家だけに理窟を云ふ」「勉强するだけに成績がよい」「千圓もかけただけ立派だ」「値の高いだけ品もよい」のやうに、其の物事に相當する意を示すとき。

此の場合には下に接尾語の「に」を附けることが多い。

四、「取るだけ減る」「取られるだけ足す」「むづかしいだけ手がかゝる」のやうに、其の物事に順應する意を示すとき。

ほか・しか　「ほか」「しか」は次の例のやうに、或物事に限る意を示すときに用ゐる。

此の場合には下を否定の事柄で應じる。

「ほか」の例

これほか殘らぬ。

遣り通すほか仕方がない。

止めさせるほか仕方がなからう。

少しほかない。

おつかさんにほか話さない。

「しか」の例

私しか行きませぬ。

僅かしかない。

ほん物としか思へない。

きり・ぎり　「きり」「ぎり」は「これきり(ぎり)やらない」「君が來るきり(ぎり)誰も來ない」「去年逢つたきり(ぎり)まだ逢はぬ」「旨いきり(ぎり)で滋養にはならぬ」のやうに、或物事に限る意を示す。

ほど　「ほど」は次の二つの場合に用ゐる。

一、「手のひらほどある」「腹の裂けるほど食べる」「目に見えぬほど小さい」「凄いほど色が青い」のやうに、物事の程度を云ふとき。

二、「考へるほど迷ふ」「言つて聞かせるほど分つて來る」「長いほど便利だ」のやうに、其の物事に順應する意を示すとき。

くらゐ・ぐらゐ　「くらゐ」「ぐらゐ」は次の例のやうに分量程度を示すときに用ゐる。

「くらゐ」の例

透き通るくらゐ色が白い。

字の書けぬくらゐ不自由なことはない。

痛いくらゐ打つた。

「ぐらゐ」の例

兄弟ぐらゐ頼もしい者はない。

少しぐらゐ飲んでもよい。

やら　「やら」は次の四つの場合に用ゐる。

一、「魚やら鰭がある」「見えるやら笑つてゐる」「忙しいのやらさつぱり來ない」のやうに、物事を推量するとき。

○「やら」は文語の「やらむ」から來た助詞である。

二、「人やら毛物やら分らぬ」「來るやら來ないやら分らぬ」「善いやら惡いやら見分けが出來ぬ」のやうに、物事を並列して、其の中の何れか不定なとき。

三、「何やら出て來た」「幾つやら分らぬ」「誰にやらやつた」のやうに、物事の不定なとき。此の場合には上に疑の語がある。

四、「金やら銀やら銅やら色々な鑛物が出る」「歌ふやら踊るやら大變な騒ぎだ」「飲ませるやら食はせるやら一通の世話ではない」「悲しいやら淋しいやらで夜も寐ない」のやうに、物事を並列するとき。

か　「か」は次の三つの場合に用ゐる。

一、「及第か落第か分らぬ」「行くか行かないかきまらぬ」「長いか短いか知れぬ」「吉田とか吉川とか云ふ人」のやうに、物事を並列して、其の中の何れか不定なとき。

二、「誰か來てくれ」「何か買はう」「どこでか逢はう」のやうに、澤山な物事の中の何れ

か不定なとき。此の場合には上に疑の語があつて、下に命令又は未來時の動作が來る。

三、「誰か來てゐる」「幾年かたつた」「どこへか行つた」のやうに、物事の不定なとき。

此の場合にも上に疑の語がある。

○第三類にも「か」がある。

なり　「なり」は次の四つの場合に用ゐる。

一、「前は山なり、後は川なり、要害の土地だ」「風は吹くなり、雨は降るなり、ほんたうに閉口した」「髪は多いなり、色は白いなり、點の打ちどころがない」のやうに、物事を列擧するとき。

二、「これなりそれなり買つて下さい」「行くなり行かぬなり早くきめたまへ」「お松となり、お勝となり行つてお出で」のやうに、物事を並列して、其の中の何れでもかまはぬ意を示すとき。

三、「何なり買つて下さい」「誰となり行つてお出で」のやうに、澤山な物事の中のどれでもかまはぬ意を示すとき。此の場合には上に疑の語がある。

右二・三の「なり」は「と」を附けて「なりと」としても用ゐる。「なりと」は「り」を省いて「なと」とも云ふ。

四、「それなり上げよう」「坐つたなり動かぬ」「長いなり使ふ」のやうに、物事を其の儘に差置く意を示すとき。

第三節　第三類の助詞

文の終に附いて其の體を變ずるものを第三類の助詞とする。次の十五の辭は之に屬する。

か　「か」は次の二つの場合に用ゐる。

一、「あれが君の家か」「お前も行くか」「客は歸つたか」「此の川は深いか」のやうに、體言又は用言「だ」の語尾を有する形容動詞を除く助動詞指定の助動詞「だ」を除くの終止形に附いて問ひ掛ける意を示すとき。

「か」は上に疑の語があるときには、「いつ來る(か)」「何をしてゐる(か)」のやうに、之を省くことがある。

○東京地方では「雨が降つてゐるの」「お客さまはお歸りになつたの」のやうに、「の」を「か」の代りに用ゐることがある。これは「の」の下につくべき「か」「ですか」又は「でございますか」等を省いて指定の意をなくしたのである。

○東京地方では又「上野へ行つて」(上野に行つたか、又は行くかの意)「にいさんはお歸りなさつたか、又はお歸りなさるかの意)「上野へ行くこと」(上野へ行くかの意)「それでよくつて」「それでいいこと」(それでよいかの意)のやうに、動詞・助動詞の連用形に「て」、連體形に「こと」、形容詞の副詞形に「て」、連體形に「こと」を附けて問掛の意を示すことがある。いづれも婦人の用語である。

二「こんな、くやしいことが世にあらうか」「あんなに強いのに、どうして他人に負けようか」のやうに「う」「よう」推量の附いた動詞に附いて反語を示すとき。

ものか　「ものか」丁寧には「もは「そんな事があるものか(ものですか)」「一人でお前を行かせるものか(ものですか)」「なんで、おまへが憎いものか(ものですか)」「あれが綺麗なものか(ものですか)」のやうに、用言・助動詞過去時の助動詞を除くの連體形に附いて、反語を示すに用ゐる。

○「それは何といふものか(ものですか)」の「ものか(ものですか)」と之とを混同するな。

よ・い・ろ　前に述べたやうに、「よ」「ろ」は上一段・下一段・サ行變格活用の動詞・助動詞の命令形に附き、「い」は四段活用以外の動詞・助動詞の命令形に附いて、命令を云ふに用ゐる。併しサ行變格活用の動詞の命令形「し」には「ろ」が附いて「よ」「い」は附かず、「せ」には「よ」「い」が附いて「ろ」は附かぬ。

○關東地方では多くは「ろ」を用ゐ關西地方では多くは「よ」又は「い」を用ゐる。

○丁寧な命令の言ひ方は敬讓の助動詞の條下に述べておいた。

な　「な」は「惡いことはするな」「どうぞお見捨てあそばすな」のやうに、動詞及び助動詞所動・命令・敬讓・進行時・存在時の連體形に附いて禁止を云ふに用ゐる。

○東京地方では「おとりでない」「お遊びでない」のやうに、動詞の連用形に接頭語の「お」を冠らせたものに「で、ない」を續けて禁止を云ふことがある。

や　「や」は「お松や、一寸お出で」「次郎やそこの本を持つてお出で」のやうに、體言に附いて、呼び掛けるときに用ゐる。

な　「な」は次の二つの場合に用ゐる。

一「お前はいつも餘所見をするな」「よくも人を馬鹿にしたな」「君、此の家は廣いな」「妙ですな」「それでよいかな」のやうに、言ひ掛けて餘情を添へるとき。

二「あすこに居るな」「あれは犬だな」「天氣があやしいな」「もう行つたかな」のやうに、餘情を添へるとき。「な」は「なあ」と長く引いても云ふ。

ね　「ね」は「ほんたうに困るね」「實に感心だね」「いかにも美しいね」「君も來るかね」のやうに、言ひ掛けて餘情を添へるときに用ゐる。「ね」は「ねえ」と長く引いても云ふ。

ぞ　せ　「ぞ」「せ」は次の例のやうに、差抑へ、言ひ掛けて、餘情を添へるに用ゐる。

「ぞ」の例

雨が降るぞ。

先生に叱られるぞ。

道が惡いぞ。

「せ」の例

風が吹くせ。

明日（アシタ）は早く起きようせ。

今度の芝居は面白いせ。

よ　「僕も行くよ」「一寸待てよ」「早くお書きよ」「大勢來ますよ」「それは廣いよ」「それは綺麗ですよ」のやうに、輕く抑へ、言ひ掛けて、餘情を添へるに用ゐる。

さ　「さ」は「あれは犬さ」「僕も行くさ」「まあ善いさ」「爺と婆とがあつたとさ」のやうに指定し、言ひ掛けて、餘情を添へるに用ゐる。

は　「は」は「あたしも行くは」「大勢來たは」「どこでも善いは」のやうに、餘情を添へるに用ゐる。

とも　「とも」は次の例のやうに、物事の確實なことを示すに用ゐる。

「君も行くか」「行くとも」

「君も見たか」「見たとも」

「土地は廣いか」「廣いとも」

「品物は綺麗ですか」「綺麗ですとも」

○第四類にも「とも」がある。

第四節　第四類の助詞

用言に附いて、おもに節と節とを接續するものを第四類の助詞とする。次の二十の辭は之に屬する。

ば　「ば」は次の三つの場合に用ゐる。

一、「よく讀めば分らう」「見たければ見せてやらう」「長ければ切りませう」のやうに、用言・助動詞の假定形に附いて、假定するとき。

二、「金があればこそ贅澤が出來るのだ」「勉强したればこそ成績がよいのだ」「少なければこそ足すのだ」のやうに、用言・助動詞の假定形又は既定形に附いて、或事柄が他の事柄の原因となる意を示すとき。此の場合には下に「こそ」が來る。

三、「風も吹けば雨も降る」「僕も行かなければあれも來ない」「色も白ければせいも高い」のやうに、用言・助動詞の假定形に附いて、或事柄に他の事柄を取添へるとき。

と　「と」は次の二つの場合に用ゐる。

一、「勉强すると褒められる」「早く行かないと後れる」「長いと切られる」のやうに、用言及び助動詞（推量・希望・過去時・未來時を除く）の終止形に附いて、事柄を假定するとき。

二、「家に歸ると客が來て居た」「私が行きますとすぐに影を隱します」のやうに、動詞及び助動詞（所動・令動・敬讓・進行時・存在時）の終止形に附いて、或事柄と他の事柄とが同時に起る意を示すとき。

とも　「何にならうと（とも）構ひはせぬ」「何が來ようと（とも）恐れはしない」のやうに、未來時（又は推量）の動詞に附いて事柄を假定するとき。此の場合には下を反對の結果で應じる。

○「と」「とも」は文語では廣く動詞の終止形形容詞の副詞形に連ねて用ゐる。口語でも「行かずと（とも）よからう」「速くとも四五日はかゝる」など云ふことがある。

なら　「なら」は「行かうと思ふなら行つてもよい」「取られるなら取つて見ろ」「そんなに遠いなら車で行け」のやうに、用言及び助動詞の連體形に附いて、事柄を假定するに用ゐる。

○「なら」は「歸れといふのなら歸らう」「きめてしまつたのなら仕方がない」「獨で淋しいのなら

行つてあげよう」のやうに、用言及び助動詞の連體形に「の」を介して附くこともある。

「なら」は「英語なら話せる」「君になら任さう」のやうに、用言・助動詞以外にも附く。

○「なら」は「行くならば行け」「これならば氣に入らう」のやうに、「ば」を附けて「ならば」といふことがある。「ならば」は「なれば」ともいふ。

○此の「なら」を「靜かなら眠れよう」「綺麗なら貰はう」などの「なら」と混同するな。

ものなら　「ものなら」は次の二つの場合に用ゐる。

一、「取れるものなら取つて見ろ」「斬れるものなら斬つて見ろ」のやうに、勢動の動詞の連體形に附いて、すべき筈でない動作がされるならばと假定するとき。

二、「そんな所へ行かうものなら大變だ」「わるいことをしようものならすぐに縛られるは」のやうに、未來時の動詞に附いて、してならぬ動作を若し爲たらばと假定するとき。

からので　次の例のやうに、「から」は用言・助動詞の終止形、「ので」は用言・助動詞の連體形に附いて、或事柄が他の事柄の原因となる意を示すに用ゐる。

「から」の例

達者で居るから安心せよ。

佛語だから讀めない。

寒いから綿入を着る。

「ので」の例

頻りに勸めるので贊成した。

人に見られるので恥しい。

家が新しいので住心地がよい。

家が貧乏なので、人の家に傭はれてゐる。

○「刀の長いので斬る」「短いので間に合はせる」などの「ので」をこれと混同するな。

て　「て」は次の四つの場合に用ゐる。

一、「日が暮れて月が出た」「叱られて泣いた」のやうに、動詞・助動詞の連用形に附いて事の次第を示すとき。

二、「むづかしくて讀めぬ」「新しくて住心地がよい」のやうに、形容詞の副詞形に附いて、或事柄が他の事柄の原因となる意を示すとき。

三、「學問が出來て品行がよい」「鷺は白くて鴉は黑い」のやうに、動詞の連用形・形容詞の副詞形に附いて、或事柄に他の事柄を取り添へるとき。

四、「花が咲いて居る」「橋が架けてある」「先生が出席してくださる」「作文を直してあげる」「讀本を買つて來る」「子供を連れて行く」のやうに、動詞の連用形に附き、下の動詞に續けて、二つを複合させるとき。

「て」がガ行・ナ行・バ行・マ行四段活用の動詞に附くときには「急いで」「死んで」「飛んで」「讀んで」のやうに「で」になる。

し　「し」は次の三つの場合に用ゐる。

一、「富士も見えるし海も見える」「聞きもしたし見もした」「夏は涼しいし冬は暖い」のやうに、用言・助動詞の終止形に附いて、或事柄に他の事柄を取添へるとき。

二、「築山もあるし泉水もあるし實によい庭だ」「內に居れば退窟だし外に出ることは出來ないし、どうしたらよからう」「連れはあるし道は近いし行くことにきめよう」のやうに二つの事柄を取添へて、更に他の事柄に續けるとき。

○「河豚は食ひたし命は惜しし」「帶には短し襷には長し」など用ゐたのは「食ひたい。し」「惜しい。し」「短い。し」「長い。し」の「い」が省かつたのである。

三、「冗談に言ふのではなからうし善く聞かなくてはいけない」「始めて賴むのではあるまいし聽いてくれてもよさうなものだ」のやうに「ではなからう」「ではあるまい」の下に附いて「ではないのに」の意を示すとき。

が　「が」は次の三つの場合に用ゐる。

一、「繰返し讀むが分らぬ」「雨は降らぬが風がある」「品はよいが値が高い」のやうに、用言・助動詞の終止形に附いて、或事柄が他の事柄と背反する意を示すとき。

○「あした天氣ならよいが雨が降るかも知れぬ」のやうに、下に來る事柄を省くことがある。

二、「人が居らうが居るまいが頓着せぬ」「深からうが淺からうがかまはぬ」のやうに、意味の反對した、二つの事柄を並列して、それが他の事柄と背反する意を示すとき。此の場合には、いつも推量の助動詞「らしい」を除く に附く。

○「人が居らうが頓着せぬ」「深からうがかまはぬ」のやうに、並列する事柄の一つを省くことがある。此の場合には意味の輕い方を省くのが例である。

三、「これで三度登山するが、いつも上天氣で好都合だ」「昨日野球の試合を見たが、

大層面白かつた」「此の花は大層美しいが、何と云ふ花だらう」のやうに、用言及び助動詞の終止形に附いて、或事柄を言ひ終へて、之に關係ある他の事柄を言ふとき。

ても・も　「ても」は「夜が更けても本を讀む」「惡口を言はれても怒らぬ」「見なくても分る」「いくら寒くても襟卷を卷かぬ」のやうに、動詞の連用形、助動詞の連用形又は副詞形、形容詞の副詞形に附き、「も」は「家は貧乏でも志は固い」「顏は佛でも心は鬼だ」のやうに、形容動詞又は指定の助動詞の中止形に附いて、或事柄が他の事柄と背反する意を示すに用ゐる。

「ても」はガ行・ナ行・バ行・マ行四段活用の動詞に附くときには、「急いでも」「死んでも」「飛んでも」「讀んでも」のやうに「でも」となる。

○「ても」は「ぬ(ん)」には終止形に附く。又「ない」には終止形にも附く。此等の場合には皆「でも」となる。

けれども・に・のに・ものを・ものの・ところが　「けれども」「に」「のに」は用言・助動詞の終止形、「ものを」「ものの」は連體形に附き、「ところが」は過去時の助動詞に附いて、或事柄が他の事柄と背反する意を示すに用ゐる。

「けれども」の例

雨は降るけれども、風は吹かない。

春は來たけれども、花は咲かぬ。

氣分は惡いけれども出席しよう。

○「けれども」は「雨は降る。けれども風は吹かぬ」「敵は小勢だ。けれども侮りがたい」のやうに、文と文とも接續する。

○「けれども」は略して「けども」又は「けど」とも云ふ。

「に」の例

よく考へて見るに、さう云ふ道理はない。

招いたに來ない。

早く來ればよいに、なぜ來ないだらう。

「のに」の例

人はみんな行くのに、あの人だけは行かぬ。

呼びもしないのに來る。

財産も無いのに、贅澤をする。

○「通勤するのに不便だ」「やかましいのに閉口だ」の「の、に」を之と混同するな。

「ものを」の例

あんなに賴むものを、聞いてもよからう。

折角尋ねて來たものを、會つてくれない。

身に覺えはないものを、何や彼やと問ひ糺す。

「ものの」の例

ああは言ふものの、やはり名殘は惜しからう。

來は來たものの、會つてはくれまい。

身に覺えはないものの、何だか薄氣味が惡い。

「ところが」の例

昨日公園に行つたところが、花はもう散つて居た。

○「ところが」は「正直者とばかり思つて居りました。ところが大違ひでした」のやうに、文と文とも接續する。

ながら　「ながら」は次の二つの場合に用ゐる。

一「貴い國に生れながら國體を知らぬ」「行かう行かうと言はれながら、まだ來られぬ」「苦しいながら辛抱してゐる」のやうに、動詞及び助動詞の連用形、形容詞の終止形に附いて、或事柄が他の事柄と背反する意を示すとき。

「ながら」は「女ながら力が強い」「自分ながらをかしくなる」のやうに體言にも附く。

二「茶を飲みながら話してゐる」「猿に舞を舞はせながら太鼓を打つ」のやうに、動詞・助動詞の連用形に附いて、打任せた意を示すとき。

かたがた　「かたがた」は「花を見かたがた入らつしやい」「樣子を探らせかたがたやつて見よう」のやうに、動詞・助動詞の連用形に附いて、事柄の彼と此とに渉る意を示すときに用ゐる。

「かたがた」は「お禮かたがた上りました」「保養かたがた旅行しよう」のやうに、體言にも附く。

第十一章　品詞の構成

第一節　接頭語・接尾語

接頭語　語の上に附いて更に一つの語を作るものを**接頭語**といふ。接頭語には意味を添へないものと、添へるものがある。其の重なものを擧げれば次の通である。

一、意味を添へないものの例

とり	とり卷く	とり扱ふ	とり締る
おし	おし通す	おし返す	おし廣める
さし	さし出す	さし換へる	さし支へる
ひき	ひき繼ぐ	ひき越す	ひき受ける
たち	たち退く	たち歸る	たち寄る
うち	うち切る	うち殺す	うち解ける

二、意味を添へるものの例

お	お話	お讀み	お珍しい
おみ	おみ帶	おみ足	おみ輿
ご	ご近所	ご覽	ごゆるりと
ま（まつ・まん）	ま心	まつ白	まん中
き	き酒	き蕎麥	き藥
す	す手	す足	す顏
おほ	おほ口	おほ聲	おほ食ひ
こ	こ人	こ山	こ高い
うひ	うひ產	うひ孫	うひ陣
はつ	はつ花	はつ雪	はつ旅
ふ	ふ手際	ふ出來	ふ釣合
む（ぶ）	む分別	む頓着	ぶ愛相

接尾語　語の下に附いて更に一つの語を作るものを**接尾語**と云ふ。接尾語は

皆意味を添へる。これに體言を作るものと、用言を作るものと、副詞を作るものとの三つがある。

一、體言を作るものの例

イ、體言に附いて體言を作るものの例

さまさん　殿さま　奥さん　皆さん
どのどん　聯隊長どの　少尉どの　竹どん
くん　中村くん　村田くん　山本くん
がた　大臣がた　先生がた　あなたがた
たち　子供たち　わたしたち　おまへたち
ども　車夫ども　百姓ども　私ども
しゆう　檀那しゆう　子供しゆう　若いしゆう
ら　僕ら　君ら　これら
て　讀みて　書きて　見て

ロ、用言に附いて體言を作るものの例

め　控へめ　細め　長め
み　重み　弱み　深み
さ　高さ　長さ　大きさ

二、用言を作るものの例

めく　春めく　古めく　よろめく
めかす　紳士めかす　才子めかす　上手めかす
ぶる　學者ぶる　利口ぶる　高ぶる
がる　寒がる　嬉しがる　いやがる
める　圓める　高める　強める
らしい　男らしい　本當らしい　慥らしい
がましい　他人がましい　勝手がましい　隔てがましい
しい　大人(オトナ)しい　忌々しい　苦々しい
さうだ　高さうだ　狹さうだ　淋しさうだ

三、副詞を作るものの例

に　まことに困る。しきりに降る。ねずに守る。

と　追ひ追ひと増す。安々と生れる。わや〳〵とさわぐ。

ごと　袋ごとやる。籠ごと送る。皮ごと食べる。

づつ　三つづつ配る。十づつ入れる。すこしづつ出す。

第二節　熟語・疊語

熟語　「近道」「遊び歩く」「讀み難い」「今時」のやうに、二つ以上の語の結合して出來た語を**熟語**といふ。

一、熟語の名詞の例

イ、上が從で、下が主のもの。

月夜　秋風　谷川　（名＋名）
一つ家　二箇師團　三號表　（數＋名）
日暮　朝起　繩飛　（名＋動）
釣鐘　織物　押繪　（動＋名）
近道　赤子　嬉涙　（形、幹＋名）
長話　高笑　遠乘　（形、幹＋動）

ロ、上下主從の別の無いもの。

草木　縱横　上下　（名＋名）
そここゝ　あつちこつち　だれそれ　（代＋代）
水呑　筆立　手習　（名＋動）
足弱　鹽辛　端近　（名＋形、幹）
讀み書き　飲み食ひ　勝ち負け　（動＋動）
高低　薄青　善し惡し　（形、幹＋形、幹）

二、熟語の動詞の例

名付ける　爪突く　口籠る　（名＋動）
飲み込む　嚙み附く　燃え上る　（動＋動）
運動する　勉强する　視察する　（漢＋動）
近寄る　遠退く　永引く　（形、幹＋動）

見られる　着させる　飲まない　（動＋助動）

三、熟語の形容詞の例

心易い　口惜しい　縁遠い　（名＋形）
青白い　薄暗い　惡賢い　（形、幹＋形）
讀み難い（ニク）　書き易い　恐れ多い　（動＋形）

四、熟語の副詞の例

朝夕　中頃　今日明日（ケフアス）　（名＋名）
絶えず　思はず　構はず　（動＋助動）
強ひて　絶えて　例へば　（動＋助詞）
固より　（名＋助詞）
今更に　（名＋副）

五、熟語の接續詞の例

それから　それなら　それに　（代＋助詞）
それだが　それですけれども　（代＋助動＋助詞）

疊語　「人々」「輕々しい」「又々」のやうに、同じ語を繰返したものを**疊語**といふ。

一、疊語の體言の例

人々　山々　嶋々　（名＋名）
われ〳〵　だれ〳〵　どれ〳〵　（代＋代）

二、疊語の形容詞の例

女々しい　男々しい　（名＋名＋尾）
馴れ〳〵しい　つきづきしい　（動＋動＋尾）
重々しい（オモ）　輕々しい（カル）　（形、幹＋形、幹＋尾）
うや〳〵しい　つぎ〳〵しい　（×＋×＋尾）

三、疊語の副詞の例

時々　月々　數々　（名＋名）
口々に　心々に　（名＋名＋尾）
一々　一人々々（ヒトリ）　一枚々々　（數＋數）
代る〳〵　見る〳〵　泣く〳〵　（動＋動）

追ひ〳〵に　絶え絶えに　思ひ〳〵に（動＋動＋尾）
よく〳〵　長々　薄々　早々（形＋形）
安々と　黒々と　近々に（形、幹＋形、幹）
なほ〳〵　ゆめ〳〵（形、幹＋形、幹＋尾）
はる〴〵　さら〳〵（副＋副）
おや〳〵　まあ〳〵　あれ〳〵（感＋感）

四、疊語の感歎詞の例（×＋×）

文章篇

第一章　文及び其の成分

文　語辭が結合して一つの完全な思想を表すものを**文**又は**文章**と云ふ。文は種々の成分から成り立つ。

第一節　主要成分

主要成分　「風が吹く」「花が散る」の文の「風」「花」のやうに、文の說明の題目となる語を**主語**と云ひ、「吹く」「散る」のやうに、文の主語の動作を叙述する語を**述語**と云ふ。主語と述語は文を構成するに闕くことの出來ぬ成分であつて、これが無いときには、如何に多くの語辭を綴り合せても、完全な思想を表すことが出來ぬ。此の二つを**主要成分**といふ。

主語　主語になるものは(イ)體言、(ロ)體言を接續詞又は助詞で接續した一團の句

(ハ)連體形の用言動詞に助動詞の附いたものを含む。又はそれで終つた句・節に「の」の附いたもの、(ニ)語・句・節を引用したものなどで、(ロ)以下は總べて體言に準じて用ゐたのである。例へば、

イ、風が吹く。
ロ、猫及び犬が居る。
紙と筆と硯がある。
ハ、別れるのがつらい。
見たのが悪い。
白いのがよい。
綺麗なのがよい。
船に乘るのは危險だ。
内を治めるのが妻の務だ。
日のたつのは早い。
女の紺足袋をはいたのは下品だ。

ニ、「だ」は「である」の轉じたものだ。
「秋の田の」は天智天皇の御製だ。
「猫も茶を飲む」はこしやくなことを云つた諺だ。

主語には多くの場合には、助詞の「が」が附くのであるが、必要に應じては、

蝙蝠は毛物だ。
兄も出征しました。
粥さへ食べぬ。
君こそ失敬だ。
雨ばかり降る。

のやうに、第二類の助詞の附くことがある。

○第二類の助詞は主語でない語の下にも附くのであるから、此等の助詞の附いたものをいつも主語だと思つてはならぬ。

述語　述語になるものは、(イ)用言又はそれに辭の附いたもの、(ロ)用言に準じて用ゐた句又はそれに辭の附いたもの、(ハ)體言又は體言に準じて用ゐたものに辭の附

いたものなどである。例へば、

イ、鳥が飛ぶ。
　雪は白い。
　こゝは靜かだ。
　私は**行**かない。
　おまへは行つたか。

ロ、人が見て居る。
　鳥が飛んで行く。
　花が散つてしまつた。
　おまへも來て見ろ。

ハ、正成は忠臣だ。
　蝙蝠は鳥か。
　あの人も行くのだ。
　それはお前が惡いのだよ。

第二節　補足成分

補足成分　「人が馬に乘る」「父が財産を長男に讓る」の「馬」「長男」のやうに、不完全自動詞又は他動詞の動作の落ち着くものを表すのを**補語**と云ひ、「猫が鼠を捕る」「父が財産を子に讓る」の「鼠」「財産」の樣に、他動詞の動作を受けるものを表すのを**客語**と云ふ。又「子守が子に泣かれる」「田舍の人が掏摸に巾着をすられる」の「子」「掏摸」のやうに、所動の動詞の補語になつたものを**所動の補語**と云ひ、「教師が生徒に畫を書かせる」「父が太郎に次郎を呼ばせる」の「生徒」「太郎」のやうに、令動の動詞の補語になつたものを**令動の補語**と云ひ、「太郎が犬を走らせる」「母が三郎を湯にはいらせる」の「犬」「三郎」のやうに、令動の動詞の客語になつたものを**令動の客語**と云ふ。補語・客語も述語の性によつては必要な成分であつて、不完全自他動詞、所動の動詞又は或令動の動詞に補語がなく、他動詞及び或令動の動詞に客語がないときには、思想を完全に表すことが出來ぬ。此の二つを**補足成分**といふ。

○「山が見える」「仕事をする」の「見える」「する」のやうに、補語を要せぬ動詞も、用ゐ方がかはれば、

「あの人は啞と見える」「水を湯にする」のやうに、補語を要することがある。

形容詞は普通補語を要せぬけれども、「これはそれと同じ」「三角形の内角は二直角に等しい」の「同じ」「等しい」のやうに、中には補語を要するものがある。

○「此の品はよい」「横町は暗い」「調が精しい」「道が近い」「交が疎い」の「よい」「暗い」「精しい」「近い」「疎い」のやうに補語を要せぬ形容詞も、用ゐ方がかはれば、「乳菓は子供によい」「此の土地の地理に暗い」「藝に精しい」「猿は人に近い」「世事に疎い」のやうに、補語を要することがある。又外の場合には補語を要しないものも「今年は去年より寒い」「紅葉は花より美しい」の「寒い」「美しい」のやうに、比較した結果をいへば、之を要することになる。

補語　補語になるものは、主語になるものと同じ資格の語・句・節及び次の例のやうに、述語になるものと同じ資格のもの、又はそれで終つた句・節を體言に準じて用ゐたものなどである。

昔の人は太陽を動くと思つてゐた。

灯も消えたと見える。

僕はこれを丁度適當だと考へる。

花瓣の散るのを蝶々が舞つて居るのかと思つた。

「なる」といふ動詞を述語とする文では、「空が暗くなる」「町が賑かになる」のやうに、副詞が補語になる。

補語には多くの場合には「と」又は「に」と云ふ助詞が附くのであるが、時としては、

水が樋を傳ふ。

顔が前へ向ふ。

二階から下りる。

天まで屆く。

和犬は洋犬より小さい。

のやうに、他の第一類の助詞の附くことがある。

客語　客語となるものは主語となるものと同じ資格の語・句・節である。

客語には「を」と云ふ助詞が附く。併し「酒(　)は飲まぬ」「御飯(　)も食べた」「菓子か菓物か(　)買つて來い」のやうに、之を省くことがある。

第三節　總主語・獨立語

總主語　「梅の花は香が高い」「教科書は印刷が鮮明だ」の文の「高い」「鮮明だ」は述語で、「香」「印刷」は主語である。さうして、「梅の花」「教科書」は此の主語・述語を併せたものを述語のやうにして、其の題目になつて居る。このやうな語を**總主語**といふ。

○戸は私が閉めます「人力車は日本人が發明した」の「戸」「人力車」は「閉めます」「發明した」の客語を標出したのである。このやうに用ゐたのを總主語と混同するな。

總主語となるものは主語となるものと同じ資格の語・句・節である。

總主語には多くの場合には「は」と云ふ助詞が附くが、「スペイン人も髪が黒い」「君こそ了簡が違つてゐる」のやうに、他の第二類の助詞の附くことがある。

獨立語　「あれ、汽車が來る」「おとうさん、お客樣が見えました」「お花や、一寸お出で」の「あれ」「おとうさん」「お花」のやうに、他の成分に關係の無い語を**獨立語**と云ふ。

獨立語になるものは感歎詞及び呼掛の語である。

第四節　附屬成分

附屬成分　「美しい鳥が鳴く」「綺麗な着物を着る」の「美しい」「綺麗な」は、それ〴〵「鳥」「着物」と云ふ體言を限定し、「馬は早く走る」「値がちつと高い」の「早く」「ちつと」は、それぞれ「走る」「高い」と云ふ用言を限定して居る。體言を限定するものを**形容的修飾語**と云ひ、用言を限定するものを**副詞的修飾語**と云ふ。形容的修飾語と副詞的修飾語とは文を構成するに必要な成分ではなくて、これが無くても、完全な思想を表すことが出來る。此の二つを文の**附屬成分**と云ふ。

形容的修飾語　形容的修飾語になるものは、(イ)體言又は體言を接續詞か助詞かで接續した一團の句、其の他總べて體言に準じて用ゐたものに「の」の附いたもの、(ロ)連體形の用言（動詞に助動詞の附いたものを含む。）又はそれで終つた句・節、(ハ)指示形容詞などである。

例へば、

イ、一隊の兵士が進む。

栗毛の馬に乗る。

地理と歴史の檢定試驗を受ける。
少しの事を迎山に云ふ。
遠くの山が見える。
外國からの荷物が屆いた。

ロ、歸る人が多い。
聽衆が廣い講堂に滿ちて居る。
有益な本を讀め。
港にはいつた軍艦は「朝日」である。
犬を連れてゐる人に遭つた。あの人の連れてゐる犬は獵犬だらう。
私どもは責任の重いことを覺つて居ります。
こゝは前哨が敵の斥候を擊退した所だ。

ハ、この本は私のです。
どんな物を買ひませう。

形容的修飾語は幾つも重なつて、同じ體言を限定することがある。例へば、

廣い、深い湖水が森の中にある。
世に重んじられる、立派な學者になつた。
某會社は交際に長じた、身元の確かな社員を募集する。
品行の正しい、學力の優等な生徒が賞品を受けた。

副詞的修飾語　副詞的修飾語になるものは(イ)副詞又は副詞に準じて用ゐた句・節(ロ)主語となるものと同じ資格の語・句・節に第一類の助詞の附いたもの、(ハ)第四類の助詞の附いた節などである。

イ、遙に富士山が見える。
馬は早く走る。
山田君は今日は來まい。
絶えず敵の動靜を偵察する。
飢ゑた犬のやうに吠え廻る。
敵が蜘蛛の子の散るやうに潰亂した。

ロ、こゝに紙入が落ちてゐる。

鳥が空を飛ぶ。
東京へ行く。
七時から十時まで勉強する。
半紙又は洋紙に字を書く。
錐か針かで穴をあけよう。
短冊の美しいのに歌を書く。
小刀のよく切れるので紙を裁つ。
父が歸るまで待つてください。
八、水が淺ければ、大船は通はぬ。
汽車から降りると、雨が降つて來た。
雨が降ると思ふなら、傘を持つて行け。
旱魃が續いたから、川の水が減つた。
子供が泣くので、やかましい。
橋が落ちて、鐵道が不通になつた。

品はよいが、値が高い。
人が惡口をいつても、おこらぬ。
花は美しいけれども、實はならぬ。
苦しいと云ひながら辛抱して居る。

*　*　*　*　*　*

形容的修飾語は主要成分・補足成分などの體言を限定するばかりでなく、又修飾語中の體言をも限定し、副詞的修飾語は述語の用言を限定するばかりでなく、又修飾語中の用言をも限定する。例へば、
寺の五重塔の尖が森の上に見える。
番頭が商業の盛んな大阪へ、多くの貨物を仕入れに行く。
汽車がずつと向ふから、黑い煙を吐いて來る。
風が吹けば倒れさうな家だ。

主語・補語・客語・述語などにそれ〴〵の修飾語を併せて、**主部・補部・客部・述部**などと云ひ、主部に對し、補部・客部・述部を併せて**叙述部**と云ふ。

第二章　成分の位置

成分の普通の位置　成分の排列には略一定した順序がある。

次の通である。

一、「花が(主)咲く(述)」「雨が(主)降る(述)」のやうに、主語は文の始に置き、述語は終に置く。但し總主語があるときには「象は(總主)眼が(主)小さい(述)」「旅順攻圍軍は(總主)乃木大將が(主)司令官である(述)」のやうに、之を主語の上に置く。

二、「水が(主)着物に(補)かゝつた(述)」「矢が(主)的に(補)中つた(述)」又は「猫が(主)鼠を(客)捕る(述)」「子供が(主)唱歌を(客)歌ふ(述)」のやうに、補語又は客語は主語と述語との間に置く。

三、補語が一つの文に二つあるときには、「母が(主)子に(所、補)袖に(補)縋られる(述)」「賊に(所、補)家に(補)はいられた(述)」のやうに、所動の補語を上に置く。

四、補語と客語が一つの文にあるときには、「馬を(客)木に(補)繋ぐ(述)」「教師が(主)生徒に(補)英語を(客)教へる(述)」のやうに、何れを上又は下に置いてもよい。

五、二つの補語と客語があるときには、「甲が(主)乙に(所、補)其の子を(客)馬鹿といはれる(補)(述)」「父が(主)家庭教師に(令、補)おちよに(補)英語を(客)教へさせる(述)」のやうに、所動又は令動の補語を上に置き、他は前項の規則に從ふ。

六、「人の(形、修)心は(主)さま〳〵である(述)」「犬を(形、修)連れた人に(補)遭つた(述)」「雨の(形、修)降りさうな(形、修)空模樣である(述)」のやうに、形容的修飾語は限定される體言の上に置く。

七、「馬は(主)早く(副、修)走る(述)」「東京へ(副、修)行く(述)」「力の(副、修)及ぶ限り(副、修)盡力する(述)」のやうに、副詞的修飾語は限定される語の上に置く。但し文の中に補語または客語があるときには、「全(主)市が(副、修)忽ち(副、修)火焔に(補)包まれた(述)」「大いに(副、修)敵を(客)破つた(述)」のやうに、其の上に置く。又接續の用を兼ねるものは、「譬へば(副、修)洪水が(主)堤を(客)崩すやうな(形、修)有樣である(述)」「一體(副、修)おまへは(主)

形、修　述
どこの者か」のやうに、主語の上に置き、第四類の助詞の附いた節も「風が吹いて、
主　述　副、修　主　述
浪が立つ」「花は美しいけれども、實は生らぬ」のやうに、亦主語の上に置く。

副詞的修飾語の、時又は所に關するものは「昔爺と婆とがあつた」「或國に一人の王
主　述　副、修　主　述　副、修　形、修
子があつた」のやうに、主語の上に置くことが多い。

八、「おや、さやうでございますか」「竹や、おまへ何をしてゐるのか」のやうに、獨立語は文の上に置く。

成分の倒置　成分の普通の位置は略、右の通であるが、文の中で、趣意の一番深いものを重く云ふために、又は語調を整へるために、わざと其の位置を顚倒させることがある。

二　一
何だ、それは。

二　一
よいではありませんか、此の景色は。

二　一
きつと忘れるな、今言つたことを。

二　一　三
門は私がしめました。

一　三　二
きつとなります、えらい人に。

一　三　二
これが母です、私の、

二　一
學問します、東京で。

二　一
着物を着ろ、風をひくから。

二　一
まゐりますよ、雨が降つても。

二　一
こちらにお向きなさいよ、お美代さん。

第三章　成分の省略

文の成分は其の意味の言外に推知される限に於て、之を省略することがある。其の中主語は殊に屢〻省略する。

主語の省略　主語を省略する重な場合を擧げれば、次の通である。

一、說明の題目となるものは自分だと云ふことをばいはなくても推測の出來るとき。

(私は)明日上野へまゐります。

(私は)唯今まゐらうと思つてゐるところでございました。

二、說明の題目となるものは話し掛ける人だと云ふことをばいはなくても推測の出來るとき。

(あなたは)いつお歸りになりました。

(あなたは)何を見ていらつしやる。

竹や、(おまへ)一寸お使に行つておくれ。

三、說明の題目となるものが、一般の人であるとき。

(誰も)此所に落書をするな。

(誰も)園內の木を折つてはならぬ。

(人々が)滿洲の都を新京と云ふ。

四、前の文又は節に一度あらはれて、二三度繰返さなくても推測の出來るとき。

或所に一人の老人が居た、(その老人は)毎日山へ木を樵りに行つて居たが、……

ゆふべ盜人がはいりましたが、(その盜人は)何にも取らないで、(その盜人は)逃げてしまひました。

おまへはまだ歳は行かぬけれども、(おまへは)おとうさんの子ではないか。

(おまへは)なぜに此のくらゐな事にまどふのか。

述語の省略　述語を省略する重な場合は次の通である。此等の場合には上の成分に附く助詞を、一所に省略することがある。

一、二つ以上の文又は節に同じ述語があつて、其の一つを擧げれば、他はいはなく

ても推測の出來るとき。

二、日目は何事もなく過ぎてしまつた。又三日目も四日目も(過ぎてしまつた)。

父がたび〳〵轉任したものですから、兄は大阪で(生れ)、私は京都で(生れ)、弟は廣島で生れたのでございます。

二、他の語意でたやすく推測の出來るとき。

あなたへも宜しく(申してくれ)とおつしやいました。

そんな馬鹿なことが(されるものか)。

人の噂も七十五日(に過ぎない)。

述語が形容動詞であるときは其の語尾、體言に指定の助動詞の附いたものであるときは其の助動詞を省略することがある。又形容詞の副詞形又は形容動詞・指定の助動詞の中止形の下に來る「ございます」(又は「ございます」)を省略することもある。

イ、これは不思議(だ)。

昔は昔(だ)。今は今(だ)。

ロ、毎度ありがたう(ございます)。

まことにおさう〳〵で(ございます)。

あのおかたが、おあねいさまで(ございましたか)。

補語・客語の省略　補語及び客語は、多くは前の文又は節に一度あらはれて、二三度繰返さなくても推測の出來るときに省略する。

お風呂が沸きました。さあ(お風呂に)おはいりなさいませ。

太郎も海軍士官になつたが、次郎も(海軍士官に)なつた。

志賀君は珍しい本が出ると、すぐに(其の本を)買ふ。

「ゆふべ火事があつたが、君は(其の火事のあつたことを)知つてゐるか」「いや、僕は(其の火事のあつたことは)少しも知らぬ」

或問に對する答を云ふ文では其の眼目の所だけを言つて、他の成分を悉く省略することが多い。

「誰が來たか」「お友達が(來ました)」

「(おまへは)本をどこにしまつたか」「(私は)(本を)本箱に(しまひました)」

「(おまへは)何を見たのか」「(私は)こはいものを(見ました)」
「誰のおつかさんが來るのか」「私の(母が)(まゐるのです)」
「(君は)鳥を何羽取つたか」「(僕は)(鳥を)二羽(取つた)」
「(あなたは)どこへいらつしやいましたか」「(私は)東京へ(まゐりました)」
「(おまへは)なぜ行かないのだ」「(私は)すこし用事がありますから、(私は)(まゐらないのです)」
「用事があるから、(おまへは)どうするといふのか」「(用事が)(ありますから)(私は)まゐらないと云ふのです」

第四章　節の種類

節　一つの完全な思想を表しては居るが、或大きな文章の一部分になつて居るものを**節**と云ふ。節は左の四種に分けることが出來る。

名詞節　「日の經つのは早い」「私はたび〳〵猫の鼠を取るのを見ました」「古い諺にも蒔かぬ種子は生えぬといつてある」のやうに、體言に準じて用ゐた節を**名詞節**と云ふ。

叙述節　「熊は力が強い」「此の本は印刷が鮮明だ」のやうに、述語のやうに用ゐた節を**叙述節**と云ふ。

形容節　「雨の降る日は陰氣だ」「船が浪の荒い玄海灘を過ぎた」「こゝは幽靈の出さうな所だ」のやうに、形容的修飾語として用ゐた節を**形容節**と云ふ。

副詞節　「春は來たけれども花はまだ咲かぬ」「水が淺いから大船は通はぬ」のやうに、副詞的修飾語として用ゐた節を**副詞節**といふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

附屬節　名詞節・叙述節・形容節及び副詞節を、其の屬して居る、大きな文に對して**附屬節**と云ふ。

附屬節は他の附屬節を含むことがある。例へば、

太郎は人の惡口するのを怺へたので、父に譽められた。

ロシヤは土地が廣いけれども、不毛の地が多い。

からだのわるい人が過度に勉强するのはよろしくない。

山口君は「萬一用事が出來たら缺席するかも知れぬ」と申しました。

値はすこし高いが、品がよいから買ひませう。

獨立節　「猫は鼠を捕り、犬は夜を守る」「帆は風に取られ、楫は浪にさらはれた」「父母の恩は山よりも高く、海よりも深い」のやうに、二つ以上の節が何れに屬すると云ふことなく、互に對等の價値をもつてゐるものを**獨立節**と云ふ。

獨立節は多くは其の述語を中止形にして、下の節に續けるのであるが、「琴も出來れば、生花も出來る」「色が白くてせいが高い」「築山もあるし、泉水もある」のやうに、或事柄に他の事柄を添へるときに用ゐる第四類の助詞で接續することがある。

獨立節は附屬節を含むことがある。例へば、

歳を取るのは春で、茸を取るのは秋だ。

ロシヤは土地が廣く、日本は氣候がよい。

天氣のよい日は暑いし、雨の降る日は鬱陶しい。

月も滿ちれば虧けるし、人も奢れば衰へる。

附屬節は獨立節を含むことがある。

男の子の沖で游ぎ、女の子の濱邊で貝を拾ふのを見た。

ロシヤは土地も廣いし、人口も多い。

德の高く行のよい人は尊敬される。

雨もやみ用事もすんだら行くことにしよう。

第五章　文の種類

單文　叙述節より外の節を含まぬ文を**單文**といふ。例へば、

此の馬は大層早く驅ける。

私は日本海海戰に參加した「朝日」を見ました。

旅から歸つた人が其の子にいろ〳〵珍しい土産物をやつた。

畠山重忠は三日月と云ふ、逞しい、栗毛の馬に乘りました。

友人の畜つてゐる馬は大層からだが太つてゐる。

○右の例の「友人の畜つてゐる(馬)」は節のやうに見えるが、「畜ふ」と云ふ他動詞の叙述を全うする客語を缺いて居るから、節ではない。又「子の仕へる親」は「仕へる」と云ふ不完全自動詞の叙述を全うする補語を缺き、「人の馬をつなぐ櫻」は「つなぐ」と云ふ不完全他動詞の叙述を全うする補語を缺いてゐるから、此等も節ではない。隨つて此等を含んでゐる文も、尙單文である。

「筆と硯は有用な文房具である」「松や竹や梅などを庭に植ゑる」「犬も猫も飼ひませぬ」「父が太郎・次郎・三郎に財産を分けてやりました」のやうに、一團又は數箇の主語・客語又は補語のある文も尙單文である。

複文　叙述節より外の附屬節を含んでゐる文を**複文**と云ふ。例へば、

私はたび〳〵猫が鼠を捕るのを見ました。
（名、節）

品性の高潔な人は世に尊敬される。
（形、節）　（副、節）

氣象臺は暴風雨の警報を發したけれども、當地は幸に無事であつた。
（副、節）

酒と煙草は衞生に害があるから、これを禁じなければならぬ。

「私は上野に行つて、(私は)博物館を見ました」「こゝは畫はさう〳〵しいけれども、(こゝは)夜は靜かだ」のやうに、各節に同じ主語のあるものも複文である。

合文　二つ以上の獨立節からできてゐる文を**合文**と云ふ。例へば、

男の子は沖で游ぎ、女の子は濱邊で貝を拾ふ。

新しいことは年々に起り、舊いことはいつとはなしにすたれる。

兄は文學者になり、私は實業家になり、弟は軍人になつた。

ロシヤは土地が廣く、日本は氣候がよい。

「あの人は詩文を甲先生に學び、(あの人は)繪畫を乙先生に學んだ」「金剛石は萬物の中で一番堅い寶石で、(金剛石は)價も一番高い」のやうに、各節に同じ主語のあるものも合文である。

混文　複文・合文の混合した文を**混文**と云ふ。

一、複文の附屬節が他の附屬節を含んでゐるもの(複文の形であるもの)の例。

副、節(複)　名、節

山路で猿の鳴くのを聞いて、非常に凄うございました。

述、節(複)　副、節

ロシヤは土地が廣いけれども、不毛の地が多い。

名、節(複)　形、節

からだの惡い人が過度に勉强するのは宜しくない。

副、節(複)

暇が無くて、御無沙汰いたして居りますが、今日は是非お伺ひいたします。

二、複文の附屬節が獨立節から出來てゐるもの(合文の形であるもの)の例。

名、節(合)　獨、節　獨、節

私は男の子の沖で游ぎ、女の子の濱邊で貝を拾ふのを見た。

形、節(合)　獨、節　獨、節

一つの舟が風の荒れ、浪の騷ぐ海を漂つてゐる。

副、節(合)　獨、節

上村艦隊はリューリックを擊ち沈め、ロシヤ・グロンボイに大火災を起させて、大いに之を破つた。

三、合文の獨立節が附屬節を含んでゐるもの(複文の形であるもの)の例。

獨、節(複)　名、節　獨、節(複)　名、節

蕨をとるのは春で、茸を採るのは秋だ。

獨、節(複)　副、節　獨、節(複)

月も滿ちれば虧けるし、人も奢れば衰へる。

形、節　獨、節(複)　形、節　獨、節(複)

慾の深い人はいつも心が騷がしく、慾のない人はいつも心が穩やかである。

副、節　獨、節(複)　副、節　獨、節(複)

ロシヤは土地が廣いけれども荒れた所が多く、人口が多いけれども、上下の者が一致してゐない。

四、右の一・二・三の更に混合したものの例。

副、節(複)　形、節(複)　副、節

友人は牧童が牛に乘つて笛を吹いてゐる畫を描いて、展覽會に出品した。

副、節(複)　獨、節　副、節　獨、節

金があればからだが弱いし、からだが强ければ金がないし、足らつたことのないものだ。

獨、節(複)　名、節(複)　複、節

私の師範學校を出て、此の村の學校の敎師となつたのは、十九歳の時で、今から七年の昔である。

第六章　文の解剖

文の解剖　文を正確に解釋するには叙述の題目となる語(主語)は何であるか、其の題目について説明する語(述語)は何であるか、説明する語(述語)を補足する語(補語・客語)は何であるか、又それを限定する語(形容的修飾語・副詞的修飾語)は何であるかを知らなければならぬ。すなはち之を各成分に解剖して、相互の關係を明かにしなければならぬ。このやうにするのを**文の解剖**と云ふ。

單文の解剖　單文を解剖するには(イ)主部と叙述部とを分け、(ロ)叙述部に就いて述部と客部・補部とを分け、(ハ)主部に就いて主語と其の形容的修飾語とを分け、(ホ)客部・補部に就いて客語・補語と其部に就いて述語と其の副詞的修飾語とを分ける。さうして之を表に排列するには(一)主部、(二)補部、(三)客の形客的修飾語とを分ける。

(四)述部の順序に之を擧げ、附屬成分は主要成分、補足成分よりも低く書く。

○總主語のある文では叙述節を更に此の方法に依つて分ける。

但し文によつては、客語・補語の兩方又は一方のないのもあり、全く修飾語のないのもあり、或成分には修飾語があつて、他の成分にはそれのないものもあるから、どの文も右に述べたやうに解剖され、排列されるのではない。詳くは次の實例に就いて知れ。

例一、鳥が鳴く。

主語「鳥が」

述語「鳴く」

例二、猫が鼠を捕る。

主語「猫が」

客語「鼠を」

述語「捕る」

例三、此の馬は大層早く走る。

主語「馬は」

形容的修飾語「此の」

述語「走る」

副詞的修飾語(句)「大層早く」

例四、私は日本海海戰に參加した「朝日」を見ました。

主語「私は」

客語「朝日を」

形容的修飾語(句)「日本海海戰に參加した」

述語「見ました」

例五、旅から歸つた人が太郎と次郎にいろ〳〵珍しいお土產をやつた。

主語「人が」

形容的修飾語(句)「旅から歸つた」

補語(句)「太郎と次郎に」

客語「お土產を」

形容的修飾語「珍しい」

述語「やつた」

副詞的修飾語「いろ〳〵」

例六、畠山重忠は三日月と云ふ逞しい栗毛の馬に乘つた。

主語「畠山重忠は」

補語「馬に」

形容的修飾語(句)「三日月と云ふ」

同「逞しい」

同「栗毛の」

述語「乘つた」

例七、友人の畜つて居る馬は大層體(カラダ)が太つて居る。

主語「馬は」

形容的修飾語(句)「友人の畜つて居る」

述語(節)「大層體が太つて居る」

主語「體が」

述語(句)「太つて居る」

副詞的修飾語「大層」

複文の解剖　複文の附屬節を一旦單文のやうに解剖じて、一箇の主語・補語・客語又は形容的修飾語・副詞的修飾語として取扱ひ、他は總べて單文の例に倣ふ。

例一、私はたび〳〵猫が鼠を捕るのを見ました。

主語「私は」
客語(節)「猫が鼠を捕るのを」
主語「猫が」
客語「鼠を」
述語「捕る」
述語「見ました」
副詞的修飾語「たび〳〵」

例二、船が浪の荒い玄海灘を過ぎた。

主語「船が」
客語「玄海灘を」
形容的修飾語(節)「浪の荒い」
主語「浪の」
述語「荒い」
述語「過ぎた」

例三、敵兵が蜘蛛の子の散るやうに潰亂した。

主語「敵兵が」
述語「潰亂した」
副詞修飾語(節)「蜘蛛の子の散るやうに」
主語(句)「蜘蛛の子の」
述語「散るやうに」

例四、氣象臺は暴風雨の警報を發したけれども、當地は幸に無事であつた。

主語「當地は」
述語(句)「無事であつた」
副詞的修飾語(節)「氣象臺は暴風雨の警報を發したけれども」
主語「氣象臺は」

客語「警報を」

形容的修飾語「暴風雨の」

述語「發した」

例五、酒と煙草は衞生に害があるから、禁じなければならない。

主語「(我々は)」

客語(句)「(酒と煙草を)」

述語(句)「禁じなければならない」

副詞的修飾語(節)「酒と煙草は衞生に害があるから」

主語「酒と煙草は」

述語(節)「衞生に害がある」

主語「害が」

述語「ある」

副詞的修飾語「衞生に」

○文に成分の省略があるときには、此の例のやうに、之を補はなければならぬ。

合文の解剖　合文の各獨立節を列擧して、之を單文のやうに解剖する。

例一、兄は文學者になり、私は實業家になり、弟は軍人になつた。

獨立節第一「兄は文學者になり」

主語「兄は」

補語「文學者に」

述語「なり」

獨立節第二「私は實業家になり」

主語「私は」

補語「實業家に」

述語「なり」

獨立節第三「弟は軍人になつた」

主語「弟は」

補語「軍人に」

述語「なつた」

例二、「新しい事は年々に起り、古い事はいつとはなしに廢れる」

獨立節第一　「新しい事は年々に起り」

主語　「事は」

形容的修飾語　「新しい」

述語　「起り」

副詞的修飾語　「年々に」

獨立節第二　「古い事はいつとはなしに廢れる」

主語　「事は」

形容的修飾語　「古い」

述語　「廢れる」

副詞的修飾語(句)　「いつとはなしに」

例三、「英國は工業が盛で、獨逸國は學術が盛である。

獨立節第一　「英國は工業が盛で」

主語　「英國は」

述語(節)　「工業が盛で」

主語　「工業が」

述語　「盛で」

獨立節第二　「獨逸國は學術が盛である」

主語　「獨逸國は」

述語(節)　「學術が盛である」

主語　「學術が」

述語(句)　「盛である」

混文の解剖　混文は複文・合文の混合したものであるから、之を解剖する方法は總べて複文・合文の例に倣ふ。

例一、私は山路で猿の啼くのを聞いて、大層恐しうございました。

主語　「私は」

述語(句)　「恐しうございました」

副詞的修飾語(複文)　「山路で猿の啼くのを聞いて」